

大物船矢倉 義經千本櫻
吉野花矢倉

竹田 出雲

作者 三好 松洛

並木 千柳

忠なる哉忠信成かな信勾踐の本意を達す洵宋公功成名遂て身退く五湖の一葉の浪枕西施の美女を伴ひし例を爰も唐倭四海漸穩よ壽永年号も短く立て元暦と命も葦片さゝぬ垣根卵の花も皆白簇と時めきて、「武威にますく、盛んあり寶祚八十一代の天子安徳帝八島の波も沉給へば後白河の法皇政を執行にせ給ふ、昵近の公卿に左大臣の左大將藤原の朝方君の御覺よき儘に己に諂ふ者より官位昇進を下し、依怙最負の沙汰大方ならず、群臣是をいかん共いの、獻慮も昔んかど各舌を巻筆や、大内記は日次も硯取添座列する、濰口も案内して源氏の大將

源九郎判官義經院參の其粧ひ、五位の雜袍善盡し、端手を盡せし太刀飾、
供の筋の三國一西塔の武藏坊辨慶、大紋の袖立烏帽子僧衣を禪る出立
の實も勇くまゝ見へよける、大内記取次て源氏の武士參上と、す上れば
左大將いかゞ義經、此度八島の合戰の様子、法皇委しく聞し召す天皇の
入水一門の最期、昨日次々記されんや上よと有、義經はつと承り、さん
い今度の戰ひ、平家の千騎斗と見へ、八嶋の磯陣を張、義經が勢の四百
余騎、只事よての勝事あしと、不時寄たる鬨、あつてふためき平家の
勢船を取乘沖中へ、天皇を具し奉る、其時城は火を放ち、明りも眼させ
しやらん、能登守教經小船を乗移り、希代の弓力引誥差誥射たる矢先の
義經が馬の先よ立ふさがる、佐藤次信諭も受、馬より下みどうと落る、其
首取んと菊王丸、船方磯邊よ上る所、弟佐藤忠信が射かへす矢先よ敵味
方、互よ不便の武士を討せし供養と相引よ、其日の軍のさつとひく、明れ

バ敵より出す扇、與市宗高射て落す、箕尾谷景清、敵が感ずる味方が
譽るされ共、源氏の勝軍平家の軍兵討さされ能登守教經、安藝の太郎同
じく次郎、二人を左右より引挟み、海へかつばと飛入たり、是を冥途の門脇
教盛、同經盛、資盛有盛行盛さんと我もくと續ひて入、新中納言知盛の
は所のは船のは供とす、んで海もさんぶと入、天皇の御事のやのかと
存せし油断の間、二位の尼上御供し、海へ入しと聞たる斗御骸をも求
得ず、女院斗り助り玉ふ、生捕たる輩の先達て一紙も認め、戲覽も備へ奉れ
ば、上るも及はずと事細かき述らる、其辨舌を其儘も日次も記し留
めける、朝方苦つたる氣色もて、夫程の功有義經、賴朝も對面叶はず腰越
か追返された、其科をいへ聞くと、聞より辨慶とみ出我君の御爲の
御兄なれ共、蒲冠者範賴卿ぬるいお生れ、手柄がまさき義經公よしなず
を付、あつちの手柄もせふ爲も、附従ふ倭人ばらが讒言と、氣の付ぬの備

倉殿の無詮義といひせも果すだまれ辨慶假讒者の業ももせよ、一旦の兄の命申開かず腰越よりそとくと歸りしり、弟の義經さへあの通りと世上の見ざらし、理非辨へぬ鹿忽の雑言尾籠至極と誠の詞、神妙之義經、軍の次第を奏問して、御前宜しく斗いんと、ういべいぬつべり取持顔、寐どりさゝんと庭工み大内記引連て、御殿間深ま入まける、小菰のかげより左大將朝方の諸太夫主ま劣ぬ人畜の苗字も猪熊大之進、義經殿御油斷く、治つたどの云あがら平家の殘黨、小松の三位惟盛の麻中若葉の内侍、其儘に置ず共あせ片付て仕廻れぬ、何事と存せしに、女童の事よあ、何万人有迎も天下のがひまからぬ事、其儘で事、濟とい、どふ成と成次第からこつちも勝手、身が主人朝方公、若葉の内侍も御執心と、皆迄云せず武藏坊、あらぬ、鎌倉殿のお指圖で縁組の兎も角も、平家方の女房を私ま引入る、味方も同前、あらぬ事と云ほぐ

せば、まやらくさいおけく、左いふ義經、平大納言時忠の聲あらずや、
いひでも夫で知た、若葉の内侍もちゑくつたあ、ちゑくつた
たどの我君を、雀のやうなぬかしたかあ、こつちが鳥から儂の蠅、ぶら
ぶらぬかさすつこめと、引搦んでちよいとほうる音のとつさり、アイト
あら立るな武藏坊、まされくと制する折から、座の間の御簾卷上左
大將朝方、怪しの箱引んだかへくいんくたる其風情、義經敬て承りぬ、
桓武天皇雨乞の時より、禁庭に留め置初音と名付たる鼓、義經兼て望む
由聞し召及べれ、此度の恩賞、院宣は添玉なるぞ、拜見せよと指出す、
義經はつと頭をさげ、數あらぬ身も及びあき願、雨乞も用る鼓軍の爲に
と存する所、有がたくしと箱押戴き、相添られし院宣どいにかある勅
命いで拜見と箱のふた開け、内よの鼓斗り、院宣迎外もあし、其鼓が則
院宣惣じて二つ有物を陰陽も取、兄弟も像る、鼓の裏皮表皮、同じ育の乳

ぶくらよかけ合されしは是兄弟、裏の義經、表の頼朝、准へて其鼓を打と有が、院宣へと聞もあへず、其鼓が院宣あらば、頼朝義經打和らぎ、睦じく禁庭の守護致せとの勅いや、そふであい、君よ忠勤を抽ずる義經を、科有と追かへせし頼朝の、法皇へ敵たふ所存、兄頼朝を打とある追討の院宣と、理を押し、兄弟中、同士打させて仕廻ん工み、義經はつと當惑し指うつ、むいて居給ひしが、日頃よ異成法皇の勅命、佞令、慮よ背く共兄を討事存じも寄ず、頼朝よ科有、義經も刑罰よ罰せらるゝが弟の道、所詮此初音の鼓、請ね、院宣も承りらずと指戻せば、朝方彌またり顔、繪言の汗のごとし、勅命を背けば、義經、朝敵あるが合点かど、無理と非道よ云枉る工みと知ても、勅命と、いふよ返答、恐れ有、只、くど斗り、たまり兼て武藏坊走つと出、左大將殿とやら、王様の天下の鑑、無理云えやれば、天下中が、皆無理いふが合点か、無理が有から傍よ居る公家の

役で赤せしづめぬ、大敵もひるまぬ大將よふ一言でやりこめたな、云
負させて、此腹の虫が堪忍せぬ、出なをして誤りやと腹立儘の傍若
無人、義經はつたと睨ませ給ひ、やおれ辨慶、高位高官と對しての悪口、最
前より無禮の段、言語同斷そこ立され、我目通りへの叶はずと、以ての
外のは機嫌よ、詮方もさく立端さく、誤り猪熊よい氣味とほくそづくを
目もかけず、朝方は打向ひ、日比の懇望返つて仇とある鼓、中請ねバ君よ
背く、中受れ、兄よ敵對、二の命を背かぬ了簡、打と有院宣の鼓、たとへ拜
領すても打さへせねバ義經が、身の誤りよもならぬ鼓、拜領す奉ると鼓
を取て退出す、は手の中よ朝方が悪事を調のまめくしり實も名高き大
將と、末世よ仰ぐ篤實の強優なる其姿、一度よひらく千本櫻榮、久しき君
が代や、蘭省の花の時錦帳の中よかしのづかれし、小松三位惟盛の臺若
葉の内侍、若君六代は前平家都を落しより、今の蘆山の隠れ里、北嵯峨の

草庵くさあんは、親子諸共身を忍しのび、仕馴しなぬ業わざも佛ぶつの行ぎやうと谷やの流ながれを水桶おけと主ぬの尼にと指さし荷なひ、庵いはりの内うちは立歸たてかへり、コレハ正ただ臺たい様さま、わしが一日いちにちたがく、するを笑せう止しがつて、荷なひの片端かたはなお手傳てづかひあされ、それくお肩かたがいたそふき下くだく、のそる業わざの夢ゆめも見みもあされまい、時代じだい迎むかひいとしばや、何なに聞きてやら六代ろくだい様のようよこく、と笑わらふてじやよふおるすなされたあふど、はたくいふてあしらへば、正ただ臺たい所ところも打うちまほれ、まじやる通とほり夫おつとの惟これ盛もり様さま、正ただ一いち門もんと諸しよ共ども、安徳あんとく天皇てんかうを供ぐ奉ほうし、都みやこを開ひらき給たまひし、此こゝ庵いはりは親おや子こ諸しよ共ども、永ながくの世よ話わもあるも、そあたが昔むかしお館やかたは、奉ほう公こう仕しやつた少ちの所ところ縁かり、惟これ盛もり様さまも西海さいかいの軍ぐんあされた日ひを、正ただ命めい日にちと思おもふて居ゐる、殊こともけふ、鼻しと君ぎみ重しげ盛もり様さまの正ただ命めい日にちなれば、心斗こころたうの香花かうか取とつて、阿伽あかの水みづも備そなへん爲ため、手てづから水みづを汲くみました、取分とれぶん此月こゝろつきの詳しやう月つき、昔むかしの形かたちで回ま向むかへば、せめて佛ぶつへ追つ善ぜんと、けふの細布はとあ身みせ

あるさもしき、小袖ぬぎ捨て卯の花色の二つ襟、うき憂身の數りの、十
二單の薄紅梅思ひの色や緋の袴、いでそよ元の大内又宮仕へせし、曠の
絹引繕ひ、蒔繪すつたる手箱より重盛公の繪像を取出しさらくど、佛
間よかけて手を合せ、小松の内府淨蓮大居士、佛果ぼだいと回向して、佛
六代うあたの爲よ祖父君稚けれ共平家の嫡流、よふ手を合して拜ふ
やいの、取わけて此繪像、親子御迎惟盛様又生うつしはん又扱重盛様が
今迄生てござらふなら、平家のよもや亡びのせじ、孫子の爲もよから
ふよああたがござらぬばつかりで、此憂目を見るわいのと、繪像又向ひ
在がごとく、くどき立くかつばと伏て、泣給ふ、折節表へくる足音、ちや
つと心得主の尼、枕屏風を引廻し、お姿隠そ間もあく、屏引明すつと這入
く庄屋殿へ判もてごんせ、夫の合点がいかぬ、今迄の一年よ一度、宗
旨の改めより外又判の入ぬ獨尼殊よこなたも月、別取よくる歩行殿と

い違ふた、何事ぞや聞さつゑやれ、されば、爰らの事での有そもおい
が、此嵯峨の庵室あんなしつも珠數じゆずの實で過るに付たり、表向うらむかひの佛を見せかけ、内
證しあうへ取入と、小みめのよい髪長かみながを出しかけて、御所出花出圍者みよしでいけい、大海小海
と名を付、一屏風ひやうぶを何ぼづと、佛前の線香せんかうを立て、くら商あきなひをとりといの
是といふも、祇五ぎわ祇女ぎよめ、佛などといふ白拍子のまやの果が、尼あんにも成て此嵯
峨も居る故も、夫で所がみだらも成た逆、人別の判形はんぎやう、此庵あんなも其様な、ま
だらくのござらぬかや、あの言まやる事ことの、佛様の見通し、そんな
まだらくな事何でせう、聞もけがれるいで下され、いよます、早ふ印
判はんおこさまつやれど、家内を見廻し立歸る、お氣がつまると主の尼枕屏
風ぶよを押のけて、今のを聞かされたか、覺おぼへもお事いふて來て、そして
マ氣味の悪い、家内をひつた見廻して、是れまたり今のやつめもお前の
お草履わづりちよろり一足そくせしめられた、小盜人ぬすびとで有た物、氣が付かいで取られ

たどいへば御臺も涙ぐみ、世を忍ぶ身の上の何角も付て案しが絶ぬ、扱
もく情なき親子の身で有りぬのど内、歎きまくもれ共、外は春め
く物賣聲、管笠かゝ笠ゆすく一荷打かたげ笠をお召さされぬかど、門
口は指覗けぬ、どでもなき、尼の内は管笠が何でいる、うさんあわろ玄
やと呵られて、お氣づかひな者でなし、わたしてござると笠取てはい
るを見れば小金吾武里、御臺所の飛立斗此間の便も聞ずとふかかうか
と案せしよ、く爰へと有ければ、小金吾も手をさげて、先の御臺所も
御堅勝、若君も御機嫌よき御顔ませを拜し、拙者も大悦仕る、いか様よ
も今日の先君重盛公の祥月命日されば、装束を改めは回向を奉
されしよ、あど、佛間も向ひ手を合せ、此君一人ましまさぬ故は一門の
いふも及ばず、我も迄も憂艱苦と暫し、涙まくれけるが、拙者もは見つ
ぎの爲、思ひ付たる笠商賣、前髪立の此小金吾何が仕付ぬ商賣なれば、は

推量すいりやう下くださるべし、扱先申上たきり、主君惟盛卿の比身の上、いまだに存命
よて高野山かうやよに入と、慥たしか成都の噂うはさ、何とぞ拙者も、若君のお供をして高野
よ登りのぼに親子の比對面、一つよの小金吾も、再び主君の比顔を拜し度願
ひ夫故旅たがの用意を致し、只今参りいと、聞より比臺も夢見しとどく、何我夫
の高野とやらんよ生ながらへてとざるどや、夫の嬉しや有がたや六代
斗といはず共、女子の上らぬ山あらば麓ふもと迄みづから自も同道どうだいせよや武里と悦び
涙なみだよくれ給へば、ヲ調お嬉しいのお道理、わしもお供えたけれど、足手
まといひお年寄尼、夫ならべ日のたけぬ内一時も早いのが、成程寸善尺
魔まのあき中よ、比親子俱ともよ比用意早ふ、笠の私が手の物早速ながら比用
よ立んど、俱よ用意の折こそあれ、表の方よ人音足音、尼の心得いつもの
通り佛壇ぶつだんの下戸と棚たなへ、比臺おやこ親子比押入つさやる其間もなく、朝方の諸太
夫猪熊大之進、家來引ぐし柴しばの戸踏ふみのけどや、と乱れ入、此庵室あんなしむよ惟

盛の比臺若葉の内侍、悴六代諸共、まかくまひ置由、注進よよつてめし捕
又向ふたり、何國又隠せし有やう、又白狀せよと星をさゝれて主の尼、は
つと思へどそしらぬ顔、是の又御難題、惟盛のみだいの所縁かゝりも
なければ、かくまふ筈もなしと、いふも傍から小金吾武里、夫の定て庵室
違ひ、外を比詮義遊、せと聞もあへず、前髪めが小指出た指圖、先うぬ
の何やつ、私菅笠賣、商人あらべとつと、歸れと、家來又持せし絹緒
の草履取出し、あらがひすまい爲、家來を所の歩行、して入込せ、證
據の爲、又取たる草履、年寄尼めが赤たれたはき物は、さいせまい、是で
もあらがふか、奥へ連行、賣さい、ちみ白狀、せんと、主の尼、小肘取て、ぐつ
と捻上家來、共、拷問、せよと、あらけ、かく引、立、一問の中、入、入、ける、小
金吾の氣も氣、あらず、何とせんか、とせんと、奥口、窺ひ、透間、を見て、比臺親
子を出し、參らせ、幸の菅笠、荷と、紐引、かなぐり、ふた押明、荷底、二人を入

參らせ旅たびの用意の風呂敷包ついでかみ、重盛公の繪像迄えぞう、取ての押込さらへ込こ、むたふたしつらふ其中うち、尼を一問い縛り上立出る大之進おほいのしん、察する所風をくらふてふけらしした物で有、菅笠屋め存ぜぬか、いか様、夫さらば此庵このあんの裏傳つたひを、けたかい女子おなごが子を連て、逃たのいたつた今と聞き、猪熊目いのくまをひからし、夫は極つた高が女の足なればぼつかけて搦からめとらん、家來二人は是は残り奥の尼めを取逃すなど、跡をしたふておつかけ行、してやつたりと小金吾心も空は荷を打かたげ、行んとするを二人の家來、兩方ふたはたは小金吾が棒端ぼうたん取てどつかと引すへ動かさねば動、どふなざる、さどふするど、胡亂ごらん者此荷底このせぞは挟はさまれたり女の着物きもの、是は誂あつらの笠のいたゞき、ぬけくとぬかそまい、は臺親子は極つたぶち明て詮議せんぎせんと、立かゝる兩人が肩骨かたほねつかんで引退る、詮義させぬ曲者くまものとすらりと抜ぬて切かくる引ひばづしく搦からをふり上、弓手馬手へたゞきふせ、急所きゅうじよを

力ちから又また任せ、たゞきのめせば二人の家來、目鼻はなより血を出しのた打廻つて死しでけり、敵たけなすの歸らぬ其中うちもと、荷にを打かたげ聲こゑはり上うへ、管笠くだかかゝ笠かさ、かさ編笠あみか網あみを遁ぬれて、出て行ゆ、花はなの姿すがたも引かへて、主しゅ從じゆ七騎ななき駒こまのはさ、營たがひの岡おかでかへり咲さか、再またびは運うん開ひらかれし彼かの頼より義よしの、奥おく州しゆ責せめ君きみの八嶋やちの勝軍國かちぐんこくも靜しづかが、舞あそび扇あふぎいやくどつと譽ほむる聲こゑ、鯨波くじなみとい打うかひり賑にぎひふは所ところの二條堀川ふたじょうほりがわ九郎義經くわじやうぎぎやうの奥方おくかた勇ゆうのは催もよほし中座ちゆうざのは殿とのの卿けいの君新殿きみしんどのの九郎義經くわじやうぎぎやう、一方女中にやうちゆうが取とりまけり、かたへまならぶに駿河すまがの次郎すけぢやう、次の功こう有あり龜井かめいの六郎むつぢやう、倍ばい臣しん外と様さまに至いたる迄いた舞まの様子ようすのまらね共とも、やつちや名人めいじんにお上手うまと、靜しづか譽ほむるも君譽きみほむる色いろめきてこそ見みへまけれ、は殿とのからは殿とのへの女中にやうちゆうの使つかひこゝたなる龜井かめいが使し者しやのは口上くちゆうじやう互あひよめでたい面白おもしろいお氣いきのつきぬかよい慰なぐさめと、は夫婦ふうふ中ちゆうでも禮義れいぎ式事しきじ納おさめられ樂がく屋やの裝束しやうそく改あらため、靜しづかは前まへ廣ひろ庇ひさしも立た出で、駿河龜井すまがわかめいも會あ釋しやくして、は臺たい所のは前まへも向むかひ、は望のぞみと有あ故ゆゑ拙舞つたなまぶりお目めよかけお

はもじさよと述べれば、始めて見ましたが面白い事、此間より醫の助を請ても、心あしく暮せしよ、我君様のお勧めでけふの思ひぬよい慰そもじよの御太義と仰よはつと辞義よ余り、其御機嫌よあまへや上たいお願ひ有、お取上下されふかど物としげよ言上る、其尋よ及べぬ事願ひどのよそくしい、近う寄て物語と仰よ猶も恐れ入、お願ひどの外でもあし、氣の毒の武藏坊辨慶殿、何か大きき仕損ひえた池、樂屋へ來て大づけない、ほろく泣てわたしを頼み、つき詰つた氣の細いお人そふで餘りとやせべいちらまし、何どかお詞添られ、我君様の御機嫌も直る標、此事ひたすら願ひど、や上れば臺におかしく君よも笑ひ、駿河の次郎ぶつてう顔、いやはやかゝつた事でのあい、六郎お聞きやつたか、武藏坊辨慶共いなる、者が、女中を頼んでお説言樂屋へいて泣どいの、ちつとそふである、彼めと馬のあふた伊勢片岡、熊井鷲の尾軍治つ

てより休息のお暇で國へ歸る、頼みよ思ふ佐藤忠信の母の病氣と
有て出羽の國へいぬる、貴殿と某の相手よあらず、どこ打て舞ふで舞か
ら取入て詫言、まそつと懲していつその事、坊主天窓を奴よせへといふ
て見たらば猶よかると、内證評義も猶よかしく、みだいの笑ひの内々も
いか成、仕損じせし事ず、笑止おかし取なしと仰有、義經公、過つる參
内の折から禁庭よての我儘、左大臣朝方公への悪口、は家來を踏打擲、其
場で急度呵付、我目通の叶のぬと付たが夫故ならん、手綱赦すと人喰
馬、公家でも武家でもたまらさぬ、持あぐんだ、齧坊主め、まそつと懲せど
は上意よ駿河の次郎圖に乗て、じたいあの七つ道具が大きな邪魔、源氏
よ坊主の大功が有とお家の名おれ此義も急度止る様仰付られ然る
べしと、す上れば龜井の六郎、まだ七つ道具の普請の役よも立が、難
儀お物のあの大長刀柄も四尺、刀も四尺、八尺の物を振廻すよよつて、傍

邊りの鼻がたまらぬ、太平の代々の役々の立ぬ人間、兎角當分押込て置
がよかると評議區々、比臺の笑止とせし其様は譏るを聞たら又れころ、俱
俱お詫と取あしあれバ義經公、性懲もあき坊主め、急度異見し重て荒氣
を出さぬ様、静も俱よと座を立給ひ、駿河龜井と引連て一間へころ、入
給ふ、静の嬉しく、急いで武藏殿を呼ましてと女中を走らせ、比前のお
詞添た故、有難ふ存じますと挨拶すれば、そもじのお願ひ故と互の辭
義も戀の義理、悋氣嫉妬の角もなく丸い天窓の武藏坊、姫婢は引立られ
このいゝで七尺の體も三尺八九寸、四尺は余る大太刀を、引ずらして予
這出る、必共口よと去とての片意地な坊様、比らふじませ、跡ぢより斗
致されますと告口いへは是さく、其様は悪くいぬ物、弱身へ付込で
むごいわろ連、人よひむくひが有分よと見廻そ目玉よ、又睨まれます、
細目だくと目顔しかめて身をちむ、静の手を取り比前へ連出、堪忍

しておやりおされて下さりませと、半分笑ひの取なし、卿の君のまじ
やか、君の船の臣の水、浪立時のおのづから、君のお船を覆す家來の業
迎云譯ないを重て急度荒氣をやめ、おとなしう成たらよかるど、子供異
見は辨慶のたゞ、アイくともみ手して誤り入し風情、然る所へ遠見の役
人篠原藤内あいたゞ敷罷出、今日大津坂本の邊りを順見致せし、忍び
忍び鎌倉武士都へ入込中、土佐坊正尊海野の太郎行永、熊野詣
ど偽り我君の討手、向ふと専の風聞、殊も只今鎌倉の大老川越太郎重
頼我君へ直談迎お次、扣へ罷有、いかゞ計ひやさんやと尋やせば、卿の
君心得の事共や、其川越太郎の自との故有人、土佐坊海野が討手の様子
まらさん爲来りしか、何れもせよ縁われ、苦しうあし通しやせ、其旨
君へも申上ん、次手は武藏もお目見へと、座を立給へ、武藏坊、討手とい
うましく、我等が世盛泰、い土佐坊でも海野でも、たつた一番一擲、首引

抜て参らんと、かけ出すを静の押どめ、それがと悪い、お上の意も待す
おどましの坊様やど、むりも引立の臺と俱、義經公のおのしまと奥の
殿へぞ急ぎ行、程なく入來る武士の、鎌倉評定の役人川越太郎重頼大紋
ゑぼし、來、年も五十の分別盛り、廣庇も入來れば、主九郎判官、装束
を改められ、まづくと立出給ひ、珍らしや重頼、兄頼朝にもはかりり
なく、百侯百司も恙あしやと仰、はつと頭をさげ、先には堅躰を拜し、恐
愧至極、右大將も安全に渡らせられ、諸大名も毎日の出勤、賢慮安んじ
下さるべしと申上れば、義經公、其方の海野土佐坊同役まで登つらん
但、外も用事有やと尋、重頼され、の義君も不審三ヶ條一々お尋
申上、返答によつて海野土佐坊と同役、恐れながら過言の赦免さ
れ、尋る子細は返答と申上れば、面白、此義經も不審あらば、兄頼朝も
成かぬ、過言の赦す、尋て見よ申開かん、遠慮無用と仰、猶も平伏し、冥

加^か余る仕合せ、逆もの事^{こと}は座改め下されよと、席^{せき}を立^たべ大將^{だいしょう}末座^{まつざ}へ
さがつて川越^{かわごへ}を、上座^{じやうざ}へこそ^{こそ}の請^こぜらる、席^{せき}改^かつて川越^{かわごへ}太郎^{たろう}いか^か義經^{ぎけい}、
平家^{へいけ}の大敵^{だいてき}を亡^{はろ}ぼし軍功^{ぐんこう}を立^たながら、腰越^{こしご}より追^おかへされ無念^{むねん}も有^あん
但^たしさもなかりしか、はつと義經^{ぎけい}袖^{そで}かき合^あせ、親兄^{おんけい}の禮^{れい}をおもんずれば
無念^{むねん}も共存^{こくじん}せず、其詞^{そのことば}虚言^{きよごん}く、親兄^{おんけい}の禮^{れい}を重^{おも}んずる者が平家^{へいけ}の首^{くび}の
内新^{うちあら}中納言^{ちゆうなごんごん}知盛^{ちかもり}、三位^{さんゐ}中將^{ちゆうしやう}惟盛^{これもり}能登守^{ののかみ}教經^{のりつね}、此^{この}三人^{さんにん}の首^{くび}の贖^{よせもの}者^{もの}、あぜ偽^{いつせ}つ
て渡^{わた}したぞ、先^{まづ}此^{この}通^{とほ}りの立腹^{たてはら}、返^{かへ}答^{こたへ}へと尋^{たず}ねれば、其言^{そのことば}譯^{わけ}いと安^{やす}し
贖^{よせ}首^{くび}を以^{もつ}て眞^{まこと}とし、實^{まこと}を以^{もつ}て贖^{よせ}とするの軍慮^{ぐんりよ}の奧義^{おくぎ}、平家^{へいけ}の廿四年^{にじゅうよんねん}の榮^{えい}
華^{くは}亡^{はろ}び失^{うせ}ても舊臣^{きゆうしん}倍^{ばい}臣^{しん}國^{くに}へ分^{ぶん}散^{さん}し、赤^{あか}旗^{はた}のへんぼんする時^{とき}を待^{まち}、一門^{いっもん}
の中^{ちゆう}も三位^{さんゐ}中將^{ちゆうしやう}惟盛^{これもり}の小松^{こまつ}の嫡子^{ちやくし}で平家^{へいけ}の嫡流^{ちやくりゆう}、殊^{こと}も親重^{おんじゆう}盛仁^{せいじん}を以^{もつ}
て人を愛^{あつ}け、厚恩^{かうおん}の者^{もの}其數^{そのかず}えらず、惟盛^{これもり}あがらへ有^あとえらば、殘黨^{ざんとう}再^{また}び取^と
立^たるの治定^{ちぢやうぢやう}、又^{また}新^{あら}中納言^{ちゆうなごんごん}知盛^{ちかもり}、能登守^{ののかみ}教經^{のりつね}の古^こ今^{こん}獨步^{どくぽ}のゑせ者^{もの}、大將^{だいしょう}の器^き

量有と招きよ從ひ馳集る者多からん、さすれば天下穩あらず、何れも入水、討死と世上の風聞幸よ、一門殘らむ討取しと、膺首を以て欺きし、一旦天下を靜謐させん義經が計畧と有て捨置れぬ大敵故、熊井鷲の尾伊勢片岡、究竟の輩を休息と偽り國へわけ遣ひし、忍びくも討取手筈かく都よ安座すれ共、心ひ今よ戰場の苦しみ、兄頼朝の鎌倉山の星月夜と諸大名よ傳かれ、月雪花の齧ひ、同じ清和の胤ながら、晨よの禁庭よ膝を屈し夕部よの代長久の基を量る、いつか枕を安んせん、淺間しの身の上と、打まはれ給ふよ、實理りと重頼も、思ひながらも役目の説破、扱ひ其の述懐有故に謀叛思し立れしかど、いひせも立すくいつとせき上、穢らひし謀叛どの何を以て何を目當と、氣色かかれどちつ共、恐れず、君鎌倉を亡ぼさんと院宣を乞給ひしよ、初音の鼓を以て裏皮の義經、表皮の頼朝打といふ聲有迎頂戴有しと、左大臣朝方公より急の志

らせど、聞て義經、扱あつかひ朝方が讒言ざんげんせしな、其鼓つづみの事ことハ某兼かねての懇望こんぼう、下し
置おるは、場ばなつて反逆はんぎやくよよせたる詞ことばの品しな、是朝方あそかたのはからひとひと思へ
共、院中いんちゆうより下さるくだるし恩物おんぶつ、請納かきめずば、綸命りんめいよ背そむく、受てうけてハ兄頼朝あに頼朝へ孝心かうしん
立たずと望のぞみ望のぞし一挺ちやう、打うてハ鼓つづみみ又また聲こゑ有ありア、あのことどく、床とこよかざ
りて詠よむ斗神い佛ぶつ陀だも上じやう覽らんあれ、打うもせ手てよもふれずと仰おほへ川越へ、
はつと三拜さんはいし、其こゝ誓言せいごんの上うへ何疑なにがひ奉ほうらん、二つの仰おほ分わられさつばり明め
白はく去くあがら、情なさい今一つは籠れん中ちゆう卿けいの君きみハ平大納言へいだい時忠ときちゆうの娘むすめ、平家へい
ハ縁組えんぐみれし心こゝろいかよ、ヤアあろかあ尋たづね兄頼朝あに頼朝のは臺政たいせい子こハ北條きたじゆうが娘むすめ、時政ときせい
氏うぢハ平家へい有ありずや、ヤア夫おとこハ主君しゆきみ頼朝頼朝、伊豆いずの伊東いとうハ座ざ有あり時北條きたじゆう一家いっかを
味方あじかたハ付つけん計略けいりやくのは縁組えんぐみ、ヤアいふあく、元卿げんけいの君きみハ汝なんぢが娘むすめ、平大納言へいだい
實まことハ育そだてたい時忠ときちゆう、肉身にくしん血ちを分わた親おやハ其方そのかた、あせ夫程おとこほどの事こと鎌倉かまくらまで云い譯やく
せさるや、但ただ義經ぎけいと縁えん有あり思ハれてハ、身みの瑕瑾かきんと思おもひ隠かくし包つんだか、卑ひ

怯至極と仰を聞より川越太郎居たる所をどつかと居赤をり、キアお情赤い義經公、清和天皇の末流、九郎義經を聳又持た、おぞろ恐く日本の鼻頭、五十又餘る川越が、名を惜んで祿を貪らふや、今肉縁をわかせば、こなたのいひ譯するも暗く、縁者の證據と成故又、鎌倉で隠した包んだ、かげ又さり日南又あり、言くろむれ共御前より、讒者の舌、強くあり、智者といわれし秩父さへ力及べぬ平家と縁組、今成て川越が娘といふて得心有ふか、卑怯至極と思し召御心根も面目なきし、皴腹一つが御土産と、指添手早又拔放す、是待てど卿の君かけ出て手又すがり、其云譯の自と及物もぎ取我咽へ、ぐつと突立どうと伏、是に驚く義經公、静もかけ出抱起し、薬よ水よと狼狽て涙より外詞なし、川越の見向もせず、出かされた時忠の娘、そふなうての御兄弟、御和睦の願ひも叶はず、とく又呼出し我手よかけんと思ひしが、我と最期を遂さして死後又貞女と云せたく、わ

さぞ自滅じめつと見せかけし、よふ拔身を奪取はらいた、適健ちつけん氣な女中やと、よそも譽ほむも心の涙、義經間近く立寄給ひ、斯しかあらんと思ひし故、わざと川越が血脈ちすじを顯あらひし、平家の縁ゆかりを除のぞかんと、思ひし甲斐かひもなき最期さいご、淺まししの身の果よしあき契ちぎをかひせしと、御目よ余る涙の色、靜御前しづかも諸共もろともに、あなたこそあたを思ひやり、泣まづみ給ふよ、手負ておびの君を戀しげよ打あがめ、一つあらず二つ迄、大切たいせつ云譯立、残る一つの平家と縁組、其科そのとがわたしが皆みななす業、戀慕こひしたふ身をお見捨すてあう、是迄こゝいかぬお情、世よは難面つれなとはかさい、明日あすを定めぬ人の命、短みじかふお別わかれやます、靜殿しづか我君様を大切たいせつと、頼むぞやいのだせき上てわつと斗たたかふ、泣けるが、川越殿、平大納言時忠が娘の首、頼朝様へお目よかけ、兄あに弟あにの和陸わかく、それが冥途めいじへよいみやげと、首指さしのばす心根を思ひやる程、川越太郎、胸むねも満みちくる涙を、呑のみこみ、傍かたわらに立より、似合にさる喩たとあれ共、玄宗げんそうの後、揚貴妃やうきひの馬ば、堀ほりが原はらよ、歌符翰かじよかん

よ討れ、天下の煩わづらひを拂はらふ、は兄弟けいけい確執かくしつとあらば万民の歎なげき、清きよき最期さいごも天下の爲ため、出でかされた適あつたれ々、あかの他人たにんの某それがしが介錯かいしゃくえてまかせうと、刀するりと抜ひはさす、其そのわかわかの他人たにんのお手をてかるも深ふかきは縁ゆかり迎むかひの事にたつた一言ひとこと、親子おやこの名乗なをりの未來みらいでせうさらば、さらば、と討首うちくびよりも骸からたの先まへへ川越かわごへが、どうと座ざしてぞまはれ居ゐる心こころぞ、思おもひやられたり、靜しずは前まへも義經よしきよも歎なげきに沈しづみ給たまふ折まから、耳みみを突つぬく鐘かね太鼓たいこ、ときをどつどど上あげける、まいかよと靜しずは仰おぼてん天君てんきんも驚おどろき、扱おひ海野うみの土佐坊とさぼうめが責せめかけしと覺おぼへたり、龜井かめい駿河すまがはと仰おぼの内うちより、かつ取刀とりやいばで兩人ふたりが、表うらをさしてかけ出るを、待まちれよと太郎たろうの呼留よめ、仰分おぼを聞き迄までいと留置どめおきしを責せめかけた、彼等かれらも讒者ざんしやと一味いまいの族うぢ、どいへ兩人ふたり鎌倉殿かまくらどのの名代なしろ、過有あやまちての敵對てきたいするも同前どうぜん、只速すみやか又追おかへすか、おどしの遠矢とほやで防ふせがれよ、さないと忽たちまち義經よしきよの怨あだと、云い合あれむ兩人ふたりの、尤なほ道理だうりと呑込のりこで表うらをさしてかけり行い、義經よしきよ公こうも

川越が詞至極と猶も氣を付、無分別の辨慶が心元あし、武藏くと呼給へば、こしもと 勉立出、武藏殿の最前を打まほれ居られしが、こまのこへ 鯨波を聞と早、悦びいさんで行れしと、聞よりこいつ事仕出さん、静參つて急ぎ制せよ、矢先危うし、よろひ 錯はつと、勉持出る、其間、なげし 投げ押の長刀のい込、表へ走る女武者、堀川夜討、はてら 静が働き、まつせ 末世よいふも是ならん、いかいと案じ給ふ所へ龜井駿河かけ戻り、我々味方を制して、さど 的矢を射させ、追歸さんと存せし所、武藏坊の無む 法者、おの 玄翁かけやを以て、敵をみまやぎ、のこぎり 大鋸にて人を引切、討手の大將海野の太郎を、てつべいからつま先迄、たぐ 擲き碎いて、ひと、あき 上れば大將、あき 鞠れ、川越太郎はつと斗、ま まあしたりひろいだり、あき 討手の大將討取て、れんし 連枝和睦の願ひも叶はず、不便や娘も全せん ちなき、いぬ 犬死、是非もあき世の有様と、くやみ 悔涙よ、あき 義經公、あき 古人の人を恨うらみ ず、傾かたむ く運うん のなすわざと思へば、恨みも悔もあし、武藏が不骨こつ を幸よ、都をひらかば、りんめい 繪命も背そむ かず、兄頼朝の

怒も休まる是を思へば卿の君が最期残り多やと涙皆夢の世の有爲
轉變、我も浮世又捨られて驛路の鈴の音きかん、龜井駿河供せよと立出
給へば川越太郎えほれながら暫しと留め床をかざりし鼓たづさへ、君
多年の懇望有し重寶残し置れて、取落されしとすも残念院勅も打と
いふ聲有と、皮より穢れし讒者の詞、打を拙者がえらべかへ、ふたしび
は連枝ぐいの取持、長路の旅の物わすれと心をこめて指出と、義經
は手ふれ給ひ、またしき兄弟の因をば打切るも運のつき、結びかへ
せよ川越と、駿河龜井をば供よてすこく、館を出給ふ、は心根のいたり
しは見送る、人も鎌倉へ是非あくくも立歸る世の成行ど、是非もあき
跡の貝がね、鯨波まんどうするも理りや、武藏坊辨慶が海野の太郎を討
取て、次手又土佐坊せしめてくれんと、追かけ廻つて正尊が、乗たる馬の
尻邊に乗、ほつ立蹴立白洲の庭、館もゆるく撞鐘聲、我君やおいする、

討手又向ひし海野の粉又して土佐坊めを生捕たり、龜井駿河の何國も居る、武藏が料理の喰殘し賞翫せぬかと呼つても、館のひつそとえづまつて、答へる人もなきふしぎ、不思議くと見廻す内、坂東一の土佐坊が腰の上帯引切て、馬より飛おり、大聲上、者共來れと下知の内、兵具のもの數百人、討とれと追取まく武藏も馬より一足飛、太刀も刀も鷲つかみ、鵬つかみの首の骨握るとされる數万力雨かあられか人礫、透間を見て土佐坊が武藏がよの腰しつかと抱、子僧めが味をやる、腰の療治でひねるかもむか、さすつておけつのぶりくとさり、尻餅ついてもひるまぬ、曲者四尺又餘るだんびら物討てか、れバひらりとはづしてうと切バ柄先で、まやんと請とめ、出かす、腰をさすつた其か、筋ひねつてくれんすと、はつしとはねて身をか、大太刀蹴落しその首獨ぐつと引よせ、腰よびつ付、我君様は臺様龜井やい、駿河やいと、引すり

廻り呼廻り、尋廻れど人々の行方も見へざれば、扱ひ此家を落給ふか、
何ゆへと身の科と思ひよらねばいふ人も、答る人も梢の鳥泣て詫す
る土佐坊を、右を左りへ持直し、亥たいこいつが廻廻り、隙取た故お供よ
おくれた、巳が首の飛方が我君様の行方、よい投算と引つかみ直平天
窓を頭巾とし、すぼりと抜て空へ投、こけたる方、巽の間、うばらおはら
の方でも有まい、元、牛若丑の方、巳午もよしや吉野も氣づかひ、爰又成
亥や酉あらで、程、有まい退付んと、忠義と思ひせし事も、今又成て、未
申思ひ違ひの荒者が、あら砂蹴立る響き、いどろくどろく、踏し
めく踏さらし、義經の、跡を寅の刻風を起して追て行

第 二

吹風又連て開ゆる、ときの聲物すさまじき氣色かな、きのふ、北關の守
後けふ、都を落人の、身と成給ふ九郎義經、數多の武士もちりく、又成

龜井六郎駿河次郎、主従三人大和路へ夜深く急ぐ旅の空、ふり返れば堀
川の御所も一時の雲煙浮世の夢の伏見道、稻荷の宮居よさしかゝれば、
龜井の六郎かくればせよかけ付、正しく、あの鯨浪の鎌倉勢、後ろを見す
るも無念く、御赦しを蒙つて一合戦仕らんと、上上くればいやとよ重清、
都て舅川越太郎が云し鎌倉殿の憤り、明白く云開き、卿の君のあへなき
最期も、義經が身の言譯なるに、早まつて辨慶が海野の太郎を討たる故
や心事を得ず都をひらくに、親兄の禮を思ふ故、此後の猶以て、鎌倉勢よ
及向ひ、主従の縁も夫限りと、仰ふ二人も腕撫さすり、拳を握つて扣ゆ
る折から義經の足跡を慕ひこがれて、静に前、こけつ轉びつ來りしが、夫
と見るより絶り付、とよよくあ我君と暫し、涙もむせびしが、武藏殿を制
せよとわしをやつた其跡で、早に所をお退と聞二里三里おくれふ共、退
付の女の念力、よふもくも、とたらまう、此靜を捨ててふたりの衆も聞

へませぬ、わしもいつまよは行やうと取赤しいふて下さんせと、歎けバ
俱ともも義經も、情こころもよめるは心、見て取て、駿河次郎しんが、主君も道すがら噂うわさな
きよの有ね共、行道筋も敵の中、取分て落行先たふの多武たふの峯みねの十字坊、女義
を同道どうどうなされて、寺中じちゆうの思おもひくい、いかんと、すかしなだむる時ときも有
武藏坊辨慶むさしはんけい息いきを切て馳はせ着つ、土佐坊海野とさばかみのを仕舞しきまてのけん、都みやこも残り思おもひ
を運ち参ま仕さんる、といひもあへぬ、は大将、扇あふぎを以ててうしと、さぐり情も
荒あ法師はらふしを、目鼻めばなもわかすたしき立た坊ばう主しゆびく共動ともどういて見よ、義經が手討てうよ
すると、御怒ごいかりの顔色がんしよくも思おもひがけなき武藏坊むさしはらふしはつと恐れ入いけるが、此こゝ間ま大
内ないにて朝方殿あさかたのも悪口あくぐちせし逆さかは勘當かんだう、永ながく出仕しもせざりしが静様しづかの詫言わびごと
では免めん有あたひきのふけふ、其勘當かんだうのぬくもりが手の中てのちゆうもほのほと、ま
ださめ切ぬ、其中そのちゆうも、又またいやは機嫌きげんをそこなふたそふかれど、辨慶はんけいが身みも
以て不調ふてう法はふせし覺おぼへなし、覺おぼなしといひ、いれまい、鎌倉殿かまくらどのと義經が、兄弟

の不和を取結べんと川越が實義、卿の君が最期を無下よしして、義經が討手よ登し、鎌倉勢をあせ切た。是でも汝が誤りて有まいか、返答せよ坊主めど、はつたと睨んで宣へば、武藏の返す詞もなく、頭も上ず居たりしが、彈赤がら其事を存せぬよて、あらね共、正しく御所の討手として登つたる土佐坊、いかよ意が重い迎主君をねらふをましくと、見て居る者の有べきか、さある時の日本よ忠義の武士の絶果なん、誤りならん幾重よもお説言仕らん、いかよ家來おれに迎、餘りむごい呵りやう、是といふも我君の漂白よりおこつた事、無念くと拳を握り終り泣ぬ辨慶が足さぬ涙をこぼせし、忠義故とぞえられける、静も武藏が心を察しあれ程よいふてじやのよ、どうぞは了簡と、やいらかお説言の、其尾よ付て龜井駿河、は免くと、詫ければ、義經面を和らげ給ひ、母が病氣で古郷へ歸りし、四郎兵衛忠信を、我が供よ召連なば武藏が詫の聞ね共、行

先が敵となつて一人でもよき郎等を力とする時節なれば、此度の赦し
置と、仰ふ辨慶はつと斗ふ頭をさげ、坊主天窓を撫廻し、是も懲よ武藏坊
主、静様の重く、の詫言、いかぬお世話と悦へば、お詫がすんでめでた
い、是からの此静が君のお供をする様も、取なし頼む武藏殿と、思ひ詰た
る其風情、今詫言頼んだ迎當り眼な返報、義理でもあつと申たけれど此
辨慶其意を得ぬ、御家來さへ跡先も引別れて行忍びの旅、落付所兼ねて
聞置多武の峯、是以て女叶はず、夕部もかゝる人心おれば、十字坊の所
存も量がたし、是より道を引ちがへ、山崎越え津の國尼が崎、大物の浦よ
りお船よめし、豊前の尾形を御頼有ふもえれず、夫おれば長の船路、猶以
てお供の成まい、ふつしりと思ひ切て都もどゞまり、君のは左右を待給
へ、といふ又わつと泣出し、今迄お傍も居た時さへ片時れめよかしらね
ば、身もよもあられぬ此静、いつ又逢れる事おやら、行先えれぬ長の旅

跡又残つて一日も何と待て居られうぞ、いか成うきめ又逢迎も、ちつ共
いどのぬ武藏殿、連ていて下さんせと涙ながら我君又、ひしくと抱付
離れがたあき風情之、静が別れ又判官も目をまばたきおのせしが、只
今武藏が言通行先知ぬ旅おれ、都又残り義經が迎ひの船を待べしと
龜井又持せし錦の袋夫こあたへと取出し、是こそ年來義經が望をうけ
し初音の鼓、此度法皇より下し給ひり、我手又入おがら一手も打事な
りがたき、兄頼朝を討と有院宣の此鼓、打ね、違勅の科遁れず、打、正
しく鎌倉殿又敵對も同然、二つの是非をわけ兼たる此鼓、身をも離さ
持たれ共、又逢迎の筐共、思ふて朝夕なぐさめ、と渡し給へ、手又取上今
迄いさり共と思ふ願ひも綱も切、鼓をひしと身又添て、かつばとふして
泣ぬたる、龜井六郎すゝみ出、長詮義又時移り土佐坊が、殘黨原討て來ら
ば御大事と重清又諫められ涙と供又立給へ、静の其儘我君の御袖又

すがり付つわし一人ふり捨すられこがれ死し又死しんより瀬川せがわへも身を投なて
死しるくど泣なさけべバ、人ひとも持も余あまし、過あやまち有あての我君わがきみの御名のみなの疵きず何なにとせん
方駿河ほうすんがの次郎じらう立寄たてよりて會あ釋しやくもなく取とりて引退ひきひき、幸さいの縛しばり繩なはと鼓つづみの調引てういんほど
き静しずかの小腕こわ手てバしかく、過あやまちさせぬ小手こて縛しばり、道みちの枯木こぼく又鼓つづみと供ともよ、かんじ
がらみ又くもりつけ、邪魔じゃまの拂はらふたり、いざとせ給たまへと諸共しよとも又道みちをば
やめて急いそぎ行い、跡あと又静しずかの身みをもがき我君わがきみの後うしろらげ見ての泣なさいての見
ま、どうよく赤駿河あかすんが殿どの情なさけよてかけられたまはり繩なはがうらめしい、引ひバ悲かな
しやお筐かたみの鼓つづみが損そとねう何なにとせう、ほどいて死しせて下くだされと、聲こゑをはかり
又泣なさけふの目めも當あたられぬ次第しだい之これ、落行らくぎやう義經よしきやう遁のがさじと土佐とさが郎らう等らう逸見いつみ
の藤太ふじた、數多あまたの雜兵ざつひやうめい、松明たいまつ腰挑こしちやう燈道てんどうを照てらして追おかけしが、枯木こぼくの
かけ又女の泣聲なみせ、何者なにものあらんと立寄たてよりて、こいつこそ音ね又聞き、義經よしきやうが妾めかけもの靜
といふ白拍子しらびやうし、繩なは迄までかけてあてがふたのうましく、此鼓こも義經よしきやうが重寶てうほう

せし初音といふ鼓ならん、此道筋又判官も隠れ居るに疑あし、福徳の三年めど、藤太手早く繩切ほとき、鼓をばい取引立行んとする所へ四郎兵衛忠信君の御跡えたひ来て、斯と見るより飛かくり、藤太が肩骨ひつ掴み、初音の鼓をばいかへし宙又提二三間、取て投退靜を圍ふんちかつて立たるに、心地よくこそ見へよけれ、忠信殿よい所へよふ見へたと悦べバ逸見の藤太、扱ひ忠信よき敵搦捕て高名せんと、ばらくと追取まぐ、えほらしいうんざいめら、あらバ手柄又擲て見よと、云せも立す双方より、捕たどかするをひつばづし、首筋擲てゑいやつと、右と左りへもんどり打せ、透間もなく後より、大勢ぬき連切てかされに、心得たりと拔合せ、つばなの穂先とひらめく刀を、飛鳥のこどく飛越はねこへかけ廻り眉間鬮なぎ廻ればわつと斗又退退たり、おくれて逃る、逸見の藤太がそつ首つかんでどうと投足下よふまへ、儕等が分際で此鼓を取んとい

胴たうよりあつき顔つらの皮打かわ破やぶつてくれんずと、ぼん／＼と踏ふみのめせ、ぎや
つと斗たうを最期さいごまで、其儘いき息いきの絶果たはたり、鳥居とりいの本もとのこかげより、義經よしつね主従しゆうじゆ
かけ出いく、珍めづらしや忠信ちゆうしんと、仰おほを聞きよりはつと斗たうこの存ぞんよらぬ見参けんさんと、
飛とえさつて手てをつけば、龜井駿河武藏坊かめいしゆんがほぶさざうぼう、互たがひも無事むじを語りあふ、忠信ちゆうしんかさ
ねて頭あたまをさげ、先まへのあかりぬ君きみの尊顔そんがんに、拜まがし申まをて拙者しやくしやも安堵あんた某たれがしも母ははが病やま
氣見舞きみまひの爲ために暇給いとまなり、生國しやうこく出羽でわも罷下なり永々ながくの介抱かいほう程ほどなく母ははも本腹ほんぶく
致いたし、罷登のほらんと存ぞんる中ちゆう、君腰越きみこしこへより追おかへされ、鎌倉殿かまくらどのは兄弟けいだいは中ちゆうふ和わ
と承うけはるゝ取物とりものも取とりあへず都みやこへ歸かへる道みちすがら、土佐坊君とさぼうきみの討手うちてと聞き、夜よ
を日ひ又またついで堀川ほりがわの御所ごしよへ今晚こんぱんかけ付つし、早はや都みやこをひらかせ給たまふと、聞き
より是迄こゝは跡あとまたひ、思おもひがけあき静様しやうざうのは難義なんぎを救すくひし、我存念われぞんねんの
屈つきし所ところと、申まを上あれば、悦喜えつぎ有あり、我われも當社とうしやへ參詣さんけいして、今いまの働はたらき委くしくも見み
と、かけたり、鎌倉武士かまくらぶしも又また向むかふと、かれく申付まをたれど、土佐坊とさぼう討うちれし上うへ

からの其の家來を、忠信が討たる迎構ひなし、今又始めぬ汝が手柄適と、
取り分て、兄次信も我矢面やがもて又立て討死仕たるの希代の忠臣、其弟の忠信
あれば、我腹心をわけしも同前、今より我姓名を譲り清和天皇の後胤、源
の九郎義經と名乗、まさかの時の判官又成かいつて敵を欺き、後代又名
をとつめよ、是の當座の褒美迎家來又持せしは着長忠信又たびければ、
はつと斗又押戴おたき、頭を土又すり付く、土佐坊づれが家來を追ちらせ
しと有て、は着長を下し給ひる其上又は姓名迄給ひるの生々世々の面
目、武士の冥加又叶ひしと、天を禮し地を拜し、悦び涙まくれば、判官
重て、我の是より九州へ立越豊前の尾形又心を寄ん、汝の靜を同道して
都又とゞまり、万事宜しく斗へと、君の靜又別れを惜み便もあらば音信
さらばくと立給へば、今が誠の別れかと立寄靜を武藏坊龜井駿河立
隔て押隔つれば忠信も、我君又、暇乞互又、無事を黙さ合、歎く靜を押退く、

心つよくも主しゅ従じゆ四人、山崎越に尼が崎、大物さして出給ふ。コレちも暫しばし待
てたべと、行をせいしとむれバ、は行方を打守り、は顔かほバせを見るやう
で、戀しいわいのと地ち又ひれ伏、正躰せいだうもちく泣ければ、道理だうりく去さなが
ら、別わかれも暫しばし此こゝ鼓、君の筐かたかと有あからハ君と思ふて肌身はだみ又添そへ、うさを晴はさ
せ給へやと、下し給ハるは着長きせなが、ゆらりと肩かた又引ひかたげ、なだめく、て、手
を取とバ静しずかなく、筐かたかの鼓つづみ肌身はだみ又添そへ、盡つきぬ名残なごり又むせかへり、涙なみだと、俱ともも
道筋みちすぢをたどり、く、て、行空ぎやうくうの、夜毎日よまいにちごとの入船いりふね又濱邊はまべ賑にぎハふ、尼が崎、大
物の浦うら又隠かくれちき渡海屋わかい銀平ぎんぺい、海うみをかへて船商賣店ふねしやうばいみせハ碇帆木綿いかりぼろめんのほ上うり
下りの積荷物つみものハこぶ船頭水主せんだうかこの者人絶たべのなき船問屋世とひをゆるかせよ
暮くれしける、夫ハ積荷つみものの問屋廻り内うちをまかなふ女房おどろ、宿しゆくかり客きやくの料
理拵りぢゆへ、所ところがら逆網さかあみの物鹽ものしほがらな鹽梅あんばいもあまふ育そだちし一人娘ひとりむすめ、お安やすがつ
いの轉寐うたね又、風かぜひかさゞと裾すそ又物奥ものおくの襖ふすまをぐらゞと明あ、風呂敷ふろしきわいが

け旅たびの僧そうもよきくと立出れば、是こゝは、お客僧きやくそう、今いまは膳ぜんを出します
まどこへお出いでなさるゝぞされべく、西國せいこくへの出日いっぴつ和待わまちて連共れんきもほつ
と退屈たいくつ只居ただいよよりの西町せいちょうへいて買物かひものをえて來ませう、是こゝは、残り多
い外ほかのお客きやくへの鳥貝とりがひ繪え、御出家ごしゅつがよの精進しやうじん料理りやうり分ぶんだつて拵こしらへたよ、終つひあが
つてござらぬか、イヤ、愚僧ぐそうの山伏さんぶつ成なりバ精進しやうじんせぬ、鳥貝とりがひ繪えよかるぞや夫つまで
もおまへ、けふの廿八日にじゅうはちにちで不動ふどう様のようは縁日えんにち、ほんよそふぢや、大事だいじの精進しやうじん、
なんとしよまよ事ことがない、往むかてきませうとふいと立たあいたく、
お客僧きやくそう様何なんとあされた、イヤ、別べつのことでもないが、寐ねて居ゐるの爰こゝのお娘むすめ
か、此子こゝろの上うへを踏ふみこへたれば、俄すはかに足あしがすくバつて、聞きへたちいさうて
も女子むすめあれば、虫むしがしらしてまやきバつた物もので有あ、大降たいかうのせぬ中なか、い
てきませうと武藏坊むさざぶぼう、バつてう笠かさひつかぶりいづく共ともあゝ急いそぎ行ゆ、母ははの
娘むすめの傍そばへ寄よこ、お安やす、其その様ようは轉寐てんねして、風かぜひいてたもるなやと、抱起いだきおこせバ目

をそりく、母様、おまへのおさるゝ事見て居て、終とろくと、一寐入、
夫あらば目をさまして、けさ習ふた清書をとつくりとよふ書で、と
様のお目よかきやと、子よの目のおき親心、手を引納戸よ入よける、か
る所へ誰共えらぬ鎌倉武士家來引具し、亭主よ逢ふと内よ入、女房驚
き走り出、夫の他行何の用と尋れば、身の北條が家來相摸五郎といふ
者、此度義經尾形を頼、九州へ逃下るとの風聞よよつて、鎌倉殿の仰を請
主人時政の名代として、討手よ只今下れ共、打つゝく雨風にて船一艘も
調はず、幸此家よ借置たる船、日和次第出船と聞願ふ所あれば、其船身共
が借請艦を押切て下らんず、旅人あらばほいまくり座敷を明て休息さ
せい、早ふくと權威を見せてのし上れば、女房のはつと返答よ當惑え
ながら傍よ寄、此大切な用よ船がなふて嘸難義、手前のお客も二三
日以前、日和待しては逗留、今更船を斷いふて、れ前のは用よも立がた

し、殊に先様も武士方あれば、は同船共さうせん共ともすされず、何とぞは了簡れうけん有て、今夜の所をお待なされて下さらば、其中より日和もあをり何艘もく、入船の中を借調へて上ませう、だまれ女、逗留たうりゅうがあらば儂等より云付ぬ、所の守護へ權付けんつけ云付る、奥の侍がこゝへておのらが口から云よく、身共が直ただ云べいと、すんど立袂たもとすがり、おせきなさるゝは尤なれ共、お前を奥へやりまして、直ただは相對ちいたいさしまして、船宿ふねやどの難義なんぎ、何分夫の歸らるゝ迄、お待なされて下されと手をそり、詫れど、ヤえちくどいめらうめ、奥おくの武士と逢あさぬ、察さつする所平家の余類よるい、義經よしつねの所縁かかりの者、家來ぬかるお油斷あぶたんすおと、どゞむる女房を刎退はねのけつきのけ、又取つくをあらけなく踏ふみ倒し蹴倒けたさすを、戻りかゝつて見る夫、走り入て彼侍かのが手を取て、眞まことびらば免下めんげさるべし、則私此家の亭主渡海屋銀平、は立腹たてはらの様子我等より仰下おほさるべしと膝ひざを折手ひざをつけば、儂亭主たうしゅから云て聞さん身みの北條の家來

げよござりませ、お侍様方の二腰の身の要害人の魚忽狼籍を防ぐ道具
じやとやら承りませした。去よよつて武士の武の字の戈を止るとやら、
書ませよござりませす、こしやくあやつめ、嘲るはうげた、切さかんと
抜打よ切付る、ひつばづして相摸が利腕ひんせと取、もふ了簡がならぬ
い町人の家の武士の城郭、敷居の内へ泥塵を切込さへ有よ、此刀で誰
を切、其上よ平家の餘類の、義經の所縁あんせし、旅人をおどすのか、よ
し又、判官殿もせよ、大物よ隠れあき、真綱の銀平がおかくまひやたら
何とする、真綱がひかへた、ならバびく共動いて見よ、素頭微塵よはしら
かし命を取楫此世の出船と、刀もぎ取宙よ引提持て出門の敷居にもん
どり打せば、死入斗の痛をこらへ、頬をしかめて起上り、亭主めよつく覺
へて居よ、此返報よらぬが首さらへ落す覺悟せよ、また願げた叩くか
と庭なる礎をぐつと指上、微塵よあさんと投付れ、暴風よあふたる小

船のごとく、尻又帆かけて主従の跡を見ずして逃天げる、ホ、ウよいさまく
とたべこ盈引よせ、何と女房奥のお客人も今のもやくやお聞なさつた
で有ふかと、女夫がひそめく咄し聲もれ聞へてや、一間の襖押ひらき義
經公、旅の艱苦よやつれ果たる、は顔ませ、駿河龜井も跡よしたがひ立出
る、こい存よりあやど、夫も俄又膝立直し夫婦諸共手をさぐれば隠すよ
り顯れる、いなしと、兄頼朝の不興を請世を忍ぶ義經、尾形を頼み下ら
んど此所は一宿せしよ、其方かくも量知て、時政が家來を退退け、今の難
義を救ふたるの業よ似ぬうい働き、我一の谷を責し時、鷲の尾といへる
木こりの童よ、山道の案内させしよ、山かづよは剛ある者故、武士とちし
て召つかひしが、それ又勝つた汝が働き、適昔の義經あらば、武士よ引上
召つかひんよ、有よかひなき漂泊の身と、武勇烈しき大將の身を悔たる
御詞、駿河龜井も諸共無念の拳を、掘りける、是は、有難いは仰、私も

此かいわいで、真綱まづなの銀平ぎんぺい迎、人よしられて居ますれど高が町人、今日の働はたらきも畢竟ひつぎやうやさバ寵將軍かまほしやうぐん、鎖細ささいな事がお目よとまつて、我々連よは褒美ほびのほ詞冥めう加かよ余あまる仕合せ、殊ととよ君を見覺へ奉るの八嶋へ赴おもむき玉ふ時、渡邊わたなべ福島より兵船ひやうせんの役よさされ、拙者せうしやが手船もは用よ達たつし、一度おらず此度もふしぎよお宿仕やどるもふかき縁、去によつてお爲を存ぞんじや上たきは、北條が家來取てかへさばは大事、一刻いそも早くは乗船じやうせん然るべしと、云もあへぬよ駿河の次郎、我々も其心、此天氣よては出船いいか、有らんよ夫をぬかつてよござりましよか、弓矢打物ゆみやうのお前方まへの業わざ、船ふねと日和ひよりを見る事ことの舟問屋ふねもんやの商賣しょうばい、きのふけふの辰巳たつみ、夜半よなかよの雨も上り、明方あけよの朝嵐あさかぜよかいつて、は出船いひん抜の上よ日和ひより、數年かずねんの功こうよて見置みたと見透みす様ようよいひけるの其道よとえられける、龜井かめいの六郎むろおんと立たち、銀平出いかしたり、其方そのが詞ことばよ付て雨の晴間はれまに片時かたときも早く、主君しゅきんのほ供仕くわいら

いと様侍衆を、元船迄送つてなれば、そなたもねる迄爰も居や、ほんよ
ぬしとまいた事が、千里萬里も行様も身拵へ、もふ日も暮た、用意がよく
いかしやんせど、よべどくつ共いらへあし、若晝の草臥で轉寐で、有ま
いか、銀平殿くと呼立れば、抑是の桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈
なり、渡海屋銀平どのかりの名、新中納言知盛と、實名を顯はす上、恐れ
有りど娘の手を取、上座も移し奉り、君の正しく八十一代の帝、安徳天皇
まで渡らせ給へど、源氏も世をせむられ、所詮勝べき軍あらねば、玉躰
ハ二位の尼抱奉り、知盛諸共海底も沈みしと欺き、某供奉して此年月、か
乳の人を女房といひ、一天の君を我子と呼、時節を待しかひ有て、九郎太
夫義經を今宵の中も討取、年来の本望を達せん、悦ばしや嬉しやあ、
興侍の局も悦ばれよと、いさめる、顔色威有て猛く、平家の大将知盛との
共骨柄も顯われし、扱ひ常の願ひ、今夜と思し立給ふな、わきて九郎

いすゝどき男仕損じばしを給ふか、夫よこそ術有、北條が家來相摸五郎
といひしり、我手下の船頭共、討手と偽り狼藉させ、某義經も方人の跡を
見せ心をゆるさせ、今夜の難風を日和と偽り、船中よて討取術おれ共、知
盛こそ生残つて義經を討たんと、沙汰有てい末う君をば養育もなら
ず、重ねて頼朝も怨も報いれど、去よよつて某人數を手配り解きて跡よ
りぼつ付、義經と海上よて戦ひ、西海よて亡びたる平家の悪靈、知盛が
怨靈と雨風を幸い、彼等が眼をくらません爲、我形も此ごとく、怪しく
見する白糸威此白柄の長刀よて九郎が首取立歸らん、勝負の相圖の大
物の沖よ當つて挑燈松明一度よ消さば、知盛が討死と心得、君よも覺
悟させまし、骸見ぐるしあき様よ、跡氣つかいどよき奏をえらせ
てたべ知盛早ふと勅この有がたしと龍顔を、拜しやせばおどなしき、八
ツの太鼓も御年の數を象る相圖のえらせ、早お暇と夕浪よ、長刀取直し、

巴波の紋、あたりをばらひ、砂を蹴立、早風もつれて、眼をくらし飛がごとく、かけり行、跡見送つて、典侍の局、は傍も指寄て、今知盛のおつまやつたをよふお聞なされたか、稚けれ共十善の君、此さもしき御姿よて、軍神への恐れ有、御装束と立上りまさかの時の諸共、冥途の旅の死装束と心よこめし納戸口、涙隠して入る、夜も早次第、受渡り、雨風はげ敷聞ゆれば、今頃、知盛の難義仕やらんいとをしやど、ねびさせ給へば、ひたすら、案じ詫たるは氣色、程あく局、山鳩色の衣冠、うやく敷臺のせ、其身も俱、衣服を改め、一間を出、片時も早くは装束と傍も立寄、賤の上着を脱かへて、下の衣、上の衣は衣冠も至る迄めさしかゆれば、あてやか、始めの御姿引かへて、神の末の化粧ひ、いと尊くも見へ給ふ、是からの知盛の吉左右を待斗と、そよとの音もえらせかど胸とどろかす太鼓鐘、すいや軍具最中と君のお傍も引添て、えらせを今やと

待折から、知盛の郎等相撲五郎、息つきあへず、馳付バ様子いいかも、早ふ
開せよくと局もせきよせきよ立たり、され兼ての術の通り、暮過々味
方の小船を乗出し、義經が乗たる元船間近くこそ寄しよ折しも烈
敷武庫山嵐よ連て降くる雨雷時ころ來れと水練得たる味方の勢、皆海
中よ飛込く、西國よて亡びし平家の一門義經よ恨をささんと聲よ
呼ひれば、敵よ用意やしたりけん、挑燈松明はらくと味方の船よ乗移
り、爰を戰途と戰へバ味方の駈武者大半討れ、事危く見へし、某の取てか
へし、主君知盛の先途を見届けんと、すもあへずかけり行、大事が
覆つて來た、さるにても知盛の身の上氣遣ひし、沖の様子いいかさら
んど一間の戸障子押明れば、挑燈松明星のごとく、天をこがせバ漫
たる海も一目に見へ渡り、數多の小船やり違へく、船矢倉を小だてよ
取、敵も味方も入乱れ舟を飛越刻こへて、追つまくつゝ、いゝ聲よて切

結ぶ人かげ迄もありくど戦ふ聲と風と連手に取やうと聞ゆるよぞ、
あれくはらんせあの中は知盛のおいすらんやよいづくよと延上り
見給ふ中は挑燈松明次第くは消失て沖も、ひつそとまづまれは、是こ
そ知盛の討死の相圖かど、餘り鞆れて泣れもせず途方も、くれて立たる
所は入江の丹藏朱も成て立歸り、義經主従手いたく働き味方残らず討
死まつた主君知盛も、大勢も取まかれ既も危く見へけるがかいくれも
は行方えれず、必定海も飛込では最期と存れば、冥途のは供仕らんと云
もあへて諸肌くつろげ持たる刀腹も突立汐の深みへ飛込ば、扱ひ知
盛もあへなく討れ給ひしかば、はつと斗もどうど伏前後もえらず泣けれ
ば、君も見る事聞事の、悲しさをこのさ取させて俱も、涙よくれ給ふ、肩の歎
きの中よりも君を膝も抱き上、は顔つくくどと打守り、二とせ餘りの此
見苦しきあばらやを、玉の臺と思し召ての御住居、朝夕の供は迄も、下

と同じ様よさもしい物、夫さへ君の心で、殿上よての榮花共思ふてお暮しなされし、又知盛お果あされて、賤がふせや、又身一ツ、置奉る事さへも、あらぬ様よ成果て、終よ、此浦の土と成、給ふかや、上もあきお身の上よ、悲しい事の數よが、つゞけ、つゞく物かいのと、くどき立く身も、うく斗歎きしが、よしあき悔みごと、覺悟急がんと、涙あがら、手を取なくく、濱邊よ出けれど、いと尋常ある、此海よ、沈めんかど、思へ、目もくれ、心もくれ、身もわななくと、予ふるひける、君いさかしくましませど、死る事ど、露まゝり給はず、此のふ乳母、覺悟くといふて、いつくへ連て、行のじや、そふ思し、召の理り、よふお聞遊、せや、此日の本よ、いお、源氏の武士は、びこりて、恐ろしい國、此波の下よ、こそ、極樂淨土といふて、結構あ、都がござり、ます、其都よ、祖母君、二位の尼様を、始め、平家の一門、知盛も、おのすれば、君も、そこへ、幸有て、物憂、世界の苦しみを、

まのがれさせ給へやど、なだめやせば打えほれ給ひ、恐ろしい波の下
へ只一人行のかや、勿躰なま赤いと此お乳が美うつくしう育上そだてたる玉躰たまごを、あの
なんくたる千尋ちひらの底へ遣やまして、何と身もよも有れふぞ、此お乳もお
供する、いとし可愛の育やひ君、何とね一人やられふぞ、夫うちら嬉うれい、そあた
さへいさやるからば、いづくへあり共いくわいの、まよふいふて給ひつ
たと引よせく、抱いだえめ、火か又入水みづ又溺なほるゝも前の世の約束やくそくあれバ、未み來らい
の誓ちかひましく、天照あまてらす大神おほがみへは暇いとま乞こと、東あづま又向むかひせ参まゐらそれば、美うつくしき
は手を合せ、伏拜ふせみ給ふは有様、見奉まへれバ氣きも消きえ、まよふお暇いとま乞こなされ
たのふ佛のは國くにのこあたすとゆびさす方かた又、向むかひせ給ひ、今いまぞまゐる、みも
すそ川の流ながれよ、波なみの底そこも、都みやこ有あるとい詠よみじ給へバ、お出いでかしなさ
れたよふお詠遊よみあそバした、其昔月花こゝろづきのは遊あその折よから、あやう又歌うたを詠よみ給ひ
バ、父帝ちちみかどの申まをす及およばず、祖父おじい清盛きよもり公きみ二位にの尼君あまのむすめ、取とりわけて母門院ははのら様さま、あんなほ

り悦び給はんよ、今の際よ是が、いふよかひなきは製やとかさくど
きく涙の限り聲限り歎きくどく道理なる、局の涙の隙よりも、髪
かさ上かき撫て今の早極樂への扉門出を急がんと、帝をまつかど抱上
て、磯打波よ裳をひたし海の面を見渡し、いかよ八大龍王がらがの
鱗、安徳帝のは幸なるぞや、守護仕給へとうづまく波よ飛入んとする所
よ、ゆつの間よかひ九郎義經、かけ寄て抱留給へべのふ悲しや、見赦して
死せてたべと、ふり返つて、こあたひ、聲立ちと帝を小脇よ引だかへ局の
小腕ぐつと捻上、無理無躰よ引立く、一間の内よ入給ふ、かゝる所へ知
盛の大わらひよ戦ひあし、鎧よ立矢のみのけのこどく、威も朱よ染なし
て、我家の内よ立歸れば、跡をしたふて武藏坊袈の方よ立聞共、えらす知
盛聲を上、天皇のいづくにまします、お乳の人、典侍の局と呼りくど
うと伏、無念口惜や、是程の手よよりのせむと、長刀杖よ立上りお乳

の人、我君と、よろほひくかけ廻れば、一間を踏明九郎判官帝を弓手の
小脇よりひん抱、肩を引付つゝ立給へば、あら珍らしやいかゞ義經、思ひろ、
出る浦浪よ、知盛が沉し其有様よ、又義經も微塵よあさんと長刀取直し、
勝負と誥寄ば、義經少も騒ぎ給はず、知盛さあせかれそ、義經がいふ
事有と、帝を典侍の局よ渡し、まづと歩出、其方西海よて入水と偽り、
帝を供奉し此所よ忍び、一門の怨を報んとし適々、我我家よ逗留せし
む、あみくあらぬ人相骨柄、さつする所平家の落人、辨慶よ云合め帝を
さぐる計略過て踏こへしよ、はたして武藏が五跡のしびれ、其上我よ方
人の跡を見せ、心をゆるさせ討取術我其事を量まり、解の船頭を海へ切
込、裏海へ船を廻しどくより是へ入込て、始終くいしく見届け帝も我手
よ入たれ、共日の本をしらしめす万乗の君、何條義經が擒よするいこれ
あらん、一旦の艱難の平家よ血を引玉ふ故、今某が助奉つたる逆不和

ある兄頼朝も、我誤りといふまじ、必々帝の事の氣づかぬれそ知
盛と、聞嬉しさい典侍の局、あの詞又違ひかく先程も義經殿、段々の情
よて天皇の御身の上、しるべの方へ渡さふと武士のかたい誓言、悦ん
でたべ知盛卿と聞よ擬たる氣も逆立局を取て突退、無念口惜や我一
門の怨を報へんと、心魂を碎きしよ、今夜暫時に術顯ぬれ、身の上迄しら
れし天命く、まつた義經帝を助奉る、天恩を思ふ故、是以て知盛が、
思よさるべきいぬれなし、只今こそ汝を一太刀亡魂へ手向んど、痛手
よよろめく足踏しめ、長刀追取立向ふ辨慶押隔打物わざよて叶ふまじ
と、珠數さらくと押もんでいかよ知盛、斯有んと期したる故、我もけさよ
り船手よ廻り、計略の裏をかいたれば最早惡念發起せよと、持たるいら
たか知盛の、首よひらりと投かくれば、扱ぬ此珠數をかけたの、知盛
よ出家どな、けがらぬしく、抑四性始つて、討てぬ討れ、討れて討ぬ源

平のちらひ生かぬり、死かぬり、恨をなさで置べきかど、思ひ込だる無念の顔色、眼血ばしり髪逆立、此世から悪靈の相を顯ぬす計之、かくと聞より龜井駿河主君の身の上氣づかぬしと、追々かけ付き取廻せば、佐幼稚おれども天皇の始終のわかちを聞し召、知盛も向せ給ひ、朕を供奉し永くの介抱のそちが情、けふ又丸を助けしり、義經が情おれば、仇も思ふぞ知盛と、勿體おくも涙を浮め給へば典侍の局俱も涙よくおれながら、よふれつまやつた、いつ迄も義經の志必忘れ給ふなや、源氏の平家のあた敵ど、後々迄も此お乳が、帝様もあだし心も付ふかと人々も疑ひれん、さあれバ生てお爲もおらぬ、君の仕事くれぐれも、頼置の義經殿と、用意の懐劍咽も突立名残惜げも涙顔を、打守りくくさらばと計を此世の暇へおく息のたへよける、思ひ設けぬ局の最期、君の猶更知盛も重なる憂目も勇氣も碎け暫し詞もなかりしが、天皇の座近く涙をはらくと

流し、果報くわはうのいみじく一天の主と産れ給へ共、西海の波なみは漂たぐよひ海うみの、ぞめ共汐うしほよて、水みづよかつせしは是娥鬼道おにまじある時ときの風波かぜなみよあひ、お召めいの船ふねをあら磯いそよ吹上ふきあられ、今も命いのちを失うしなひんかと多くの宦女くわんぢよが泣なさけぶり、あひけうくんの陸くわよ源平戦げんへいふの取とりあをさず修羅道しゆらだうの苦くるしみしみ、又また源氏げんぢの陣じん所ところよ數多駒かずたこまのいなしくの畜生道ちくじやうだう今いまいやしき御身みみとあり人間の憂うれ艱難げんなん目前まへよ六道むだうの苦くるしみしみを請まをたまふ、是こゝといふも父清盛ちやうせい外戚げいせきの望のぞ有ありよつて、姫宮ひめみやを御男宮みおとみやといひふらし、權威けんゐをもつて御位みゐよつけ、天道てんたうをあざむき、天照太神あまてらすおほみかみよ偽いつはりりやせし其惡逆あくさく、つもりく一門いっもん我子われこの身みよむくふたか、是非せひもなや我われかく、深手ふかを負おつたれば、あがらへ果ぬ此知盛ちせい只今いま此海こゝよ沈しづんで末代まつだいよ名なを殘のこさん大物おほものの沖おきよて判官はんくわんよ、怨うらをなせし知盛ちせいが怨靈おんりやうありと傳つたへよや、息いきある其中そのうちよ、片時かたときも早く帝ていの供奉くわんぷを願ねがむく、とよろばひ立たつ、我われの是こゝより九州くわうしゆの尾形方おしがたへ赴むかひ、帝ていの御み

身みの義經よしねかいつく迄までも供奉くわんぷせんと御手ごてを取とて出給でたまへば龜井駿河武藏かめいすまのぶさう坊ぼく御跡ごあとも引添ひきぞたり、知盛ちもり莞爾わんじと打笑うちわらて、きのふの怨うらみのけふの味方あいき、あゝ心安やすこころや嬉うれしやあ是こゝは此世このよの暇乞ひまがとふり返かへりて龍顔りゆうがんを見奉みまもるも目めも涙なみだ今の名殘なごりに天皇てんかうも、見返給みかへたまふ別れの門出かどで、とゞまるこゝたのめいどのの出船でふね、三途さんずの海うみの瀬踏せふみせんと碇いかりを取とりて頭かぶもかつき、さらばくも聲斗こゑと、渦巻うずま波なみも飛入とてあへなく消きたる忠臣ちゆうしん義心よしこころ、其亡骸なきがらの大物おほものの千尋ちひろの底そこも朽果くちはて、名なも引沙ひきさもゆられ流ながれ、くゝて跡白波あとしろなみとぞ成なる

第三

三芳野さんほうのの丹後武藏たんごぶさうも大和路おほやまとぢやわけて、名高なかつきき金峯山きんぷせんざん、藏王彌勒わらうみらくのは寶物ほうぶつもは開帳かいちやう迎野むかひのも山やまも賑にぎひふ道の傍かたはらも茶店ちやみせ構かまへて出端でたん汲ひ青前垂あおさきしたれの入端いりたんも女房にようばう盛さかりの器量きりやうよし五つか六つの男おとこの子こ、傍そばも付添つゐ鼻はな様さまど、いふで端香たんかうもさめよけれ、かれ殘のこる、身みのいとゞ猶なほ、枝えだおりや、若葉わかしの内侍うちし若君わかしの、主馬しゆめ

の小金吾武里が、嗟嘆を遁れて惟盛の、若や高野と心ざし旅の用意の小風呂敷、脊又忍海吉野なる下市村に着けるが、若君六代疝疾ふちやみ玉へハ幸の茶店、暫く床几へお休みと、内侍を誘ひ其身も脊負し包をおろし、お茶と指圖又あい／＼と、あいそこぼれて指出す、内侍つく／＼見玉ひ、こまやこあたも子持よの、自も連合の忘れ篋を伴ひし、道よりちやみて貯し、藥を殘らず飲さらし俄の難義、子持た者の相身互嗜あらば所望したしと仰ふ女房、夫いまあいかおは難義、わたしが子の生れてより腹痛一つおこしませぬ、何の用意もござりませぬ、チうれい氣の毒や、イヤほんよろれ／＼、幸此村の寺の門前又洞呂川の陀羅輔を請賣人がござりませぬ、お供の前髪様ついで一走り、く身共の當所不察内、太義おがら其方調へてくれまいか、チ、それもお安い事、わしが調へて来て上ませう、善太留主仕や但の行かおれもと暮ふ子を連て、器量よければ心

尊い寺の門前へ藥を買ひに急行、心よい女中やと内侍の見やり、六代
爰も大分木の實が有が、拾ふて遊ぶ氣のないか、金吾がひらふが大事事
いかと、いさめの詞も引立られ、おれも拾をと若君の病もわやく半分の
起立給へば、内侍も俱くひらを、拙者めがと小金吾が甘に近い大
前髪おとあげ、いも若君の機嫌取、榎椽の實を、拾ひ集むる折柄も、若き
男の草臥足是も、旅立風呂敷包、脊負てぶら／＼茶店を見付、どりや休ん
で一ぶくと包をどつかり床几ををろし、は免ありませ火を一つとたべこ
吸ひ付け、こりや皆様方の開帳参りてござりますか、わこ様の道、草かわ
しらが在所の子供と違ひ、御奇麗お生れ付やと、譽ても咄し、えおけても、
心置身のそこ／＼と詞數かく拾ひ居る、暫く休んで彼男、其落た木の
實の虫入で、見かけがよふても、皆ほがら、木も有ををれ、廻りあされど、いふよ
金吾の、こお男何をいふ、二丈余りの高木、かけ上るけづめの持ぬ、それを

心安ふ取やうがござりませ、とふして、とらば鍛錬お目よかけふと、小石拾ふて打磔枝も當つてはらくく、若君悦び腦みも忘れ、小金吾ひらへのは機嫌も内侍も嬉しく、よい事してもらやつた、過分くと一禮も冥加も餘どしらざりし、男の自慢顔何と手の内はらふじたか、まそつと打て進ぜたいが遠道かへ、お伽やても居られず、我等の参ると包を脊負、は縁有ハ重てと、いふて其場を行過る、小金吾木の實を拾ひ仕廻、是で堪忍なされ、扱ふ今の男の氣轉者と、見やる床几の風呂敷包、同じ色でもどこやらがちがふた様かと走り寄、内改れハ覺あき、しかも是ハ張皮籠、こちらの衣類の藤ぶおり、扱ハ木の實も氣を奪ひせ、取かへうせたか但しハ鹿相か、何よもせよ追かけて取かへさんとかけ出す所へ、向ふよりあたふた戻る以前の男鹿相いたしたは、死くといひつゝ、包指出し、日暮もちかし心のせく、同じ色の風呂敷敷故、重い軽いも氣も付ず取ちが

へた鹿相道^そよてふつと心付取てかへしてお詫言^{わびごと}まつびらほ免下され
と顔^{かほ}も似合ぬ手すりたいぼう、小金吾の胸落付、鹿相^{調そ}と有^あるべ云分もふり
さいが、万一紛失^{はんじつ}の物有と赦^{ゆる}さぬが合点か、何が扱相違^{さうわ}有^あるべ臺座^{たいざ}の別れ、
御存分よなされませ、其一言なら疑^{うたが}ふよ及^{およ}ばぬ共、中改^{あたら}めて請取んと
包をひらき、改め見れば相違^{さうわ}もなし、實鹿相^{調そ}も極^{きま}つた、自分なし其方の荷^か
物も持ておいきやれど、床几^{せうぎ}も残る風呂敷包、渡せば請取ふしご顔^調、此中
ぐしりのほどけたり、夫^いの最前かいつた様よの思へ共、もしやとちよつ
ど見た斗ど、いふ間にひらく張皮籠^{はりかほこ}、引ちらけて袷^{あはせ}の袖浴衣^{ゆかた}の間をさが
し見て、恟^{びつ}り仰天^{げうてん}箇^ご打ふるひ、こまやどふじや、こまないの、さいのくどき
よろく、目玉、何がさい何見へぬと、傍^{そば}も氣の毒目^{どくめ}をくべれば、兼^そて工^{たく}み
のいがみ男、腕まくりして、前髪殿^{前髪殿}、此皮籠^{調かほこ}の中よ人よ頼^{たの}れて高野へ上
る詞堂金、廿両入置た、くすねたさく、出^でしたく、出^でまやいの

と、取ても付ぬ難題も、小金吾むつと反打かけ、こいつ下郎め武士よ向つて何があんど、今一言云て見よと、きつ相かかれどびく共せず盗人たけだけまいと、其高ゆすりくぬく、赤鯛をひねりかけおどして此場をぬけるのか、ほろうまいらんな事春永よあされ、わづか甘兩で首繩のかからぬ中、四の五のいりずと出したくともがりいがみのねだり者、堪忍がど抜かけしが、お二方の姿を見て、宏つとこたへて胸撫おろし、若い人そ里や其元の覺へ違ひ、見らるゝ通り足弱をお供えたれば、縦何万兩落ちつて有ても、目をかける所存のあし、どくとそつちを吟味召れど、いれせも果す、其足弱連たが盗する付目、まやよもやと思ひせえてあるが當世のはやり物、何万兩の入ぬたつた甘兩、どふしても身が盗だどあ、まられた事、まて其盗だ證據、此皮籠の中紐なせといた、あり様の荷物も紛失が有と敷さぬといふたでないか、理結ちやぶや、出ま

やいのくど、せり誥られて小金吾も、もふ是迄と拔放す、内侍のあひて
いだしどめ、尤^もや道理じや、短氣な事を仕やつて、わしも此子も俱^も
難義、無念^も有ふと堪忍^{して}、あの者のいふ様^も了^れ管付^てやつてたも、足
弱連^たを災難^{と思ひ}胸をまづめてたもいのだ、涙よくれての給ふよぞ、
血氣^もはやる小金吾も見るよ忍びず、世^が代^{の時}でござらふから、ずだ
く、まためしてもあきたらぬやつなれ共、何をいふても第^の穂^ももお
ぢる身の上、御意の通りよ致しまえよ、口惜^ふとござりますると、こきた
ハ大事の二方を、お供の身おれハ無念をこたへ、奥齒^噛程付^あがり、甘^雨
といふ金わた、まつて置て、其類^何や、^もこい、い、く、此赤鯛^で切か、
此目でおどすか、前髪を一筋づ、抜^ぞよ、但しもふ金いふけらしたか、連
のめろからせんさくと、弱^みへかゝるを首筋つかんで引戻し、用意の路^ろ
金いふ程出して、睨^付、大切なお方をお供えた故^取る、廿兩、持てうせ

いと打付れバ、街のちらひ金見ると目も佛あく手バしかく、拾ひ集めて
耳よみ揃へテモ恐ろしい此金を那智若衆めやすつての事、ひじり取里よ
と致したとへらす口、其腮をと立寄金吾を内侍のおさへ、事あいな中ど若
君引連、立出給へバ是非もなく跡も引添小金吾も、無念をこたへ上市の
宿有、方へと急ぎ行營百度睨まれても、一度が一步も付きやせまい、うま
い仕事といがみの權太、金懷も押入て、盆屋へ急ぐ向ふへすつと、茶屋の
女房が立ふさがり、權太殿、こりやどこへ、小せんか、わしや店明てどこへ
いた、わえや旅人のお頼で坂本へ藥をかいよ、と里やよい手筈、われが居
たら又邪じや広ひらえやうよ、はづしてゐたでまし〜といふ胸ぐらを取て引
すへ、コソこあた又街さす氣ではづして居ぬぞや、最前戻りかゝつた所
よわつばさつば、指さし出たら街の正銘顯はれどんあ事よなるうもしれぬ
ど、あの松かげから聞て居た、こあさんの恐しい工みする人じや、姿の

産共心の生ぬと親御の釣瓶鮓やの彌助の彌左衛門様と云て、此村で口も利ね方、見限られ勘當同前御所の町又居た時こそ道も隔たれ、跡の月から同じ此下市又住でも、嫁か孫かと近付よもあらぬの、皆こそ様の心から、いがみの權にきぬさせて、街の權といふぞや、此善太郎の可愛さいか、博奕のもどでが入さらば此子やわしを賣て成と、重て止て下さんせ何の因果で其様な恐ろしい氣よあらしやつたど、取付駄けバ突飛し、ア引さかれめが又してのよまい言、おれが盜街の根元の、皆うぬから起つた事、ホこりや大それた事聞ねばならぬ、そりや又どふして、どふしてどの覺へが有ふ、おりや十五の年元服して、親父の言付で御所の町へ鮓商ひ、隠し女の中又儕が振袖見込たが、鯨鱈程寐入佛師達の臍くりを盗出し店の溜り徳居先身、躰半分仕廻ふてやつた、聞へたか、所で親父がほり出した、無理なわろの、其時因果と此がきが腹よ有て、親方のねだる、年貢

米を盗んで立銀、其尻が来て首が飛のを、庄屋のおほらが年賦として、毎日の催促、其金濟そで博奕よかゝり、出世して小ゆすり街此中も親父の所の家尻を切て見たれど、妹のね里めど、内の男めが、夜通しの鼻聲でとんどまんが損ねた、又けふのまんのよさ、此勢も母の鼻毛をゆそりかけ、二三貫目ゑじめてくる、酒買て待ておれ、善太よ、日の暮かねおんな、夜通しせねばれれが商賣の譲られぬと云つゝ立バ女房取付、また此上も親父の物迄だまし取とり勿躰ない、ア内へ戻つて下されど、すがれを聞ず、勿飛すを、コリヤやい善太よ留てくれど、母の教へも利口者ど、様内へサアござれと、手よまとひ付、薦かつら子か跡追の悪者、小手縛り迎うたてが、まかも血筋の糸繩で、さびたが悪い出さそと、鬼でも子よ引さるる、扱もつめたいほでじやと手を引て女房諸共立歸る、夕陽西へ入折から、主馬の小金吾武里の上市村よて朝方が、追手の人數も取まかれ、數

か所の疵きずを負おながら内侍若君御供ごきょう申し一先都へ立歸るを、跡あともつゝいて數百人遁のがさぬやらぬと追かけたり、手疵てきずの負お共氣きの鉄石てつせきの武里が、死物しぶつ狂きやうひと思おもひの刃やいば爰こゝも三人かして七人ばらまゝと、なき倒たふし其身そのみの秋あきの花紅葉はなみぢ隙すきの木の葉はの其跡そのあとへ、追手おしの大將たいしやう猪熊いのくま大之進おほしんおくれませよかけ來りやア、死し損そといめいづくへ行い、先頃せんごん嵯峨さかの奥おくまで取逆とりさかし主人朝方公しゆじんあさかたこうのは機嫌げん以もつての外ほかすさくく館やかたへ歸かへられず庵坊あんぼう主ぬしめに白狀はくじやうさせ付廻つけまわしたる此海道かひだう、惟盛ただものは臺たい若君わかしゆんを渡わたし腹はらかつさべけと呼よひつたり、手負ておひの流ながるゝ血ち汐しほをぐつと一飲ひとみ息いきをつぎ、主馬ぬしうまの判官はんくわんが躰たゝ小金吾こがねご武里ぶり息有いきあり中ちゆうのいつかかく、其一言そのひとことが絶命せつめいと、踊上おどつて討う太刀たぢをてうと請ことめはつしとはね、ひらりと見せていくるりとほづし、手練てねんを盡つくせと追おひ手負ておひ、内侍若君うちしやくわんわかしゆんあぶくひやくひやく小石こいしを拾ひろひ砂打すなうち付つ及び越こさる加勢かぜも念力ねんりき、手強てこく見ゆる猪熊いのくまが眼まなこも入いて目當めあたりくちやみ、透間すきまも切込きりこだんびらも眉間まゆかんを

わられて、頭轉倒乗かゝるを下よりも突鋒の豁骨、金吾ものつけよそり返るあなたが起れば石礫猪熊切れ小金吾も、俱よ深手の四苦八苦修羅の街予危けれ忠義の天成小金吾があんなく相手を取て押へ、ぐつと突込どゞめの刀、仕負せし嬉しやど、思ふ心のたるみよや、うんど其身も倒れ伏、悲しやど内侍若君いたなり拘抱起し、のふ金吾く、氣をはつきりと持てたも、そなたが死で自や此子の何と成物ぞ、情あや悲しやど泣入給ふ御聲の耳も通つて手負の顔上、内侍様六代様、諦めて下さりませ、心はやたけよはやれ共もふ叫ぬ、我君惟盛様の、兼て御出家のお望熊野浦まで逢奉りしといふ者有故、高野山へと心ざしお二方をか供えたれど、中く此手での一足も行れず、若君様よふお聞遊ませや、御臺様を伴ひかみやの宿といふ所よ、内侍様を殘し、お前の人を頼んで山へ登りと、様のお名に云れぬ、今道々の御出家と尋てお逢遊ませ、西

も東も畝の中、平家の公達と悟れぬ様、お命めでたう御成人の後、憚りな
ら金吾めが事思し召出されお、一滴の水一枝の花、夫が則めいとへ御
知行、成長待てありますお名残惜いお別れ、といふもせつあき息づか
ら六代君の取絶り、死でくれお小金吾、そちが死るとと様逢事があ
らぬいと、泣入給へ内待のせき上、聞てたも子心でも、そなた一人を
かゝする、惟盛様逢迄り、死まいぞくとあせ思ふていたもらぬ、一
門に残らず亡び廣い世界を敵と持、いつ迄ながらへ居られふぞ、俱と殺
してたもいのだ歎き給へ、理りと手負いと、涙とくれ先君小松の
靈盛様の日本の聖人若君の其孫君諸神諸井の恵のない事とござりま
すまい、末頼みを思し召て必短氣をお出しあされお、あれく向ふへ挑
闘の灯かけ、又も追手の来るもえれず、若君伴ひ此場を早く、深手の
あたを見捨て、いづくを當り行物ぞ、死バ俱と座し給へ、ふが

ひない六代様の大事はないか、此手で死る金吾めでござりませぬ、聞
え、あければすゝ又切腹、これ待てたも、夫程又迄思やるなら、成程先へ落ま
せう、必死でたもるあや、お氣づかひ遊ばすな、運又叶ひ跡より參道、必ず
待て居るぞやど、いふ間も近付挑燈の灯かけ又恐れ是非、かくも若君、連
て落給ふ、御心根のいたしなさ、手負の跡見送り、死なぬとやせし
偽り、三千世界の運借ても、何の此手で生られませぬ、内侍様、六代様、是が
此世のお別れでござりますと、思ふ心もだんまつま、知死期も六ツの暮
過て朝の露と消よける程、かく來る挑燈、此村の五人組何やらざり、
咄し合、山坂の別れ途、庄屋作が立留り、彌助の彌左衛門殿、貴様の鮮
商賣故、念押上よおしかける、今云付た鎌倉の侍の聞及んだ咄、何やらこ
なたの耳をねふつて兀る程いひ付たら、畏つた、どめつたむせうよ
請合たが、何と覺の有る事かや、ハテ、知た事、また衆も常からおれが性根

を知ぬか、血を分た斡でも見限つたら、門端も踏さぬ彌左衛門膝ふしが
碎けても畏つたら癩も切さぬ、またが跡からの云付がもつけ、嗟嘆の奥
から逃てきた、子を連た女と大前髪、此村へ入込だど追手からのえらせ、
所でけぢ殿がねぶりかけて、捕へたら褒美と有、こぞや又格別よい仕事、
皆も油段をせまいぞやうれ、こんな時こあたの息子の、いがみの權
太を頼んでおかふと五人組、山道行へ、彌左衛門坂へおりしも行先の手
負よべつたり行當りはつと飛退、氣味悪ながら挑燈ふり上るる、立
寄、むとたらえう切つた、旅人そふなが、追剝の所爲あらべ丸裸
よまそふち物路銀を當よ悪者の所有かど、悪い子を持親の身の、案じ過
して、手負殿、と、呼も答もなきがらよ扱、最早息絶たか、いとじ
や何國の人あるぞ、見ればふけた角前髪、袖ふり合も他生の縁、あひあみ
だ佛、あひあみだなむあみだ佛、と回向して、兎角浮世の老少不定、哀れを

見るも佛の異見、人のいがまず眞直も後生の種が大事ぞと思ひつゞけ
て行過しが、何思ひけん立とまり、取つ置つの俄の思案、そろりと立
戻り遷り見廻し、くゞて抜身を拾ひ取るより早く、死首はつしと打落し、
挑燈吹消首引提、忝いと彌左衛門、直成道も横飛も我家をさして、立歸る、
春のこね共花咲す、娘が潰た鮮あらば、おれがよかろと、買よくる、風味も
吉野下市も賣弘めたる釣瓶鮮、御鮮所の彌左衛門、留主の内も商賣も
ぬけめも内儀が早潰も、娘お里が肩綿襷も、前垂ほやくと愛も愛持
鮎の鮮、押へてしめておれさする、味いさかりの振袖が、釣瓶鮮とい物ら
し、まめ木も栓を打込で桶片付て、中噺様きのふと、様の云まやるより、
あすの晩も内の彌助と祝言さす程も、世間晴て女夫もおれとおつま
やつたが、日が暮てもお歸りおいの嘘かいお、あのいやる事いいの、何の
うそであるぞ、器量のよいを見込も、熊野参から連て戻つて、氣も心もま

ると彌助といふ我名を譲りぬし彌左衛門と改めて内の事任せて置
まやるに、そなたと娶あひす兼ての心けふの俄も役所から親父様を呼
よ來て思ひぬ障入迎ひよやるも人のおし、抗惡ふ彌助様も方々
から鮓の誂へ、仕込の桶がたるまいと明桶取まいかれました、もふ戻ら
るゝでござんえよと、噂半へ明桶荷ひ戻る男の取なりも利口で伊達で、
色も香もえる人ぞえる優男娘が好た厚鬢も冠着せても憎からず、内へ
入間も待兼て、お里の嬉しく、彌助様の戻らんしたか、待兼た遅かつた、
若やとこぞへ寄てかど、氣が廻つて案じたと、女房顔していふて見る、流
石鮓屋の娘、早い馴とぞ見へよける、母のよこゝ笑ひを合彌助殿氣
よかけて下さんお、此吉野之の辨才天の教へよよつて、夫を神共佛共戴
いて居よと有天女の掟其かひり程、愷氣も深い、又有やうの親の孫瓜の
つるよでのござらぬと云くるむれば、是のまわ却て迷惑段々お世話の

上、大切ぢお娘御迄下されお禮の申やうもござりませぬ、去りながら兎
角お前より彌助殿くんと殿付けを赤されてさり迎ひ氣の毒やつぱり
彌助どうせいかうせいとお心安ふ申、それの赦して下され、又な
せでござりませぬ、さればいの彌助といふ名は是迄連合の呼名、殿付け
ずもどうせいかうせいといひ、勿体ぢあふて云まくい云馴た通り殿付けさし
て下されど、實夫をバ大切と思ふ掟を幸娘へ是を聞がしの、母の慈悲
とぞ聞へける、お里彌助の明桶を板間へ並べて居る所へ、此家の惣領い
がみの權太門口より乙聲で、母者人くんと、云つら入ばお里の悔り、又兄御
かよふお出どもみ手そる、きよとくしい其頬何じや、よふ來たが悔り
か、わりや彌助どうまい事迄居るそふなが、彌助もかふ聞、今追出さ
れて居ても、籠の下の灰迄おれが物、けふの親父の毛虫が、役所へいたと
聞たまよつて、少母者人よいふ事が有て來た、二人おがら奥へうせふと、

腕廻まつりまわされうぢくど是よといふて立彌助、娘も跡よ引添そよて一間へこそ
の入よけれ、跡よ母親溜息ためいきつぎ、こりや又留主かつかを考へ無心よ來たか、性懲しやうちやう
も赤いわんぱく者、其儕が心から嫁子有ても、足ぶみ一ツさす事あらぬ
聞きや此村へ來て居るげなが、互よまらねばすれ合ても、嫁姑の明めく
ら、眠つふれと人くよ云れるが面目めんぼくない、不孝から者めど目よ角かどを立か
つたる機嫌きげんよぐんよやり、直でいにかぬといがみの權太、思案しあんまかへて、
中母者人今晚ほん参つたの無心でいござりませぬ、お暇じふたひ乞よ参りましたッリヤ
何で、私わたしの遠い所へ参ります程よ、親父様もお前も、随分ずいぶんおまめで
どまほれか、けれバ母の驚きおどろ、遠い所どのそ里や何所どこへ、どふした譯で何
じよ行ど、根問ねとの親のたまされこぐち、まてやつたど目をまばたき、
親の物の子の物と、お前へこそ無心むしんやせ、ついよ人の物箸はしかたし、いがん
だ事も致しませぬよ不孝からの罰ばちか、夜前わたしの大盗人よ合ましたあは、其

申す代官所へ上る年貢銀、三貫目といふもの盗取れ、云譯もかく仕様も
かく、お仕置も合ふよりいと覺悟極めておりまする、情ないめも合まじ
たどかます袖を顔に當、まやくり上ても出ぬ涙、鼻が邪廣して目のふち
へどいかに舌ぞうらめじき、あまい中にもわけて母親、實と思ひ俱も目
をすり、鬼神も横道おと、年貢の銀を盗れ死ふと覺悟いまだ出かした、災
難もあふも親の罰よふ思ひえれよ、思ひえつていおりますすけれど、
どうで死ねば成ますまい、常の儕が性根故是も銜かま
えね共、まやうぶ分よと思ふた銀、親父様も隠してやる、是ではつとり根
柢直せと、そろ／＼戸棚へ子のかげで、親も盗をする母のあまい鏡さへ
明兼る、ついがん首でこち／＼がよござりまそるとまおれたるおのが
事わざを教ゆる不孝、親の我が子が可愛さよ地獄の種の三貫目、跡をくろ
めて持て出、何ふも包んで遣たいが、と限りお程あまい親、うまいわろ

ぞやといがみの權太鮓すしの明桶あきづきよい入物、是へ、くど親子して銀かねを漬つた
る金鮓かね、蓋ふたまめ栓せんまめよいの是で目立ぬさげていねと親子が工合ぐあいの
最中さいちゆうへ、苦まがい爺親てい彌左衛門、是も疵持きずもち足の裏うら、あたふたとして門口を、戻つ
た明いと打たしく、かむ三親父と内うちの轉倒てんたう狼狽ろうたゐ廻り其桶を、爰へく
ど明桶と俱ともななべて親子のひそく、奥と口とへ引き別わかれ息いきを誥かたて
ず入いりける、おせ明ぬく、と頻しきりまたくけバ奥より彌助、走り出で戸を明
る、内入うちいり悪く傍あたりを見廻みまわし、こりや又またといつも寢ねてれるか、云付た鮓共すしどもの、
仕込しこで有あると鮓桶すしづきを提さげたり明たりぐつた、こりや思おもふ程ほど仕業しごが
できぬ、女房共にようどもやお里め何してれるぞ、只今奥へ呼よびまゑよと行彌助
を引ひといめ、内外見廻うちとそとみまわし表うらをまめ、上座へ直ただし、手をつかへ、君きみの親おやは、小松
の内府うちふ重盛公じゆうせいこうの恩おんを請まねたる某それ何卒なにぞ御子ごこ惟盛卿ただせいけいの行衛ゆきゑをと、思おもふ折
から熊野浦くまのうらまで出合であひ、月代つきやしろをすしめ此家へお供ともしたれ共、人目をひとめ隠かくり

下部の奉公、餘りと申せば勿躰なさ、女房斗ふ子細を語り、今宵祝言と申も、心の娘をば宮仕へ、彌助くど、賤しき我名をお譲り申たも、彌助くるといふ文字の縁義、人のえらじと存せしよ、今日鎌倉より、梶原平藏景時來つて、惟盛卿をかくまへ有どのつ引させぬ詮義、鳥を鷺と云拔て、歸れ共、邪智深い梶原、若や吟味も參ろもえれずと、心工みり致して、置共油斷り、怪我のもと、あそからでも我隠居上市村へね越あれと、申上れば、惟盛卿、父重盛の厚恩を請たる者の幾萬人、數限りなき其中よ、お事が様な者あらふか、昔のいか成者なるぞと、尋給へば、私めの平家は代盛りの折から、唐土硫黄山へ祠堂金お渡しあさるゝ時、おんどの瀬戸まで三千兩の金盜取れ、役目の難義切腹も及ばん所、有がたいの重盛様、日本の金唐土へ渡す我こそ、日本の本の盜賊と御身の上を悔み給ひ、重て何のたたりもなく御暇を下され、親里立歸つて、由緒ある鮮商賣、今日を安樂よ

くらせ共^{ヤがれ} 翰權太郎めが盜^{ぬす} 術^{かたりせつ}、殺^{つしやう} 生の報^{むく}ひごと、思^{おも}ひまつたる身の懺^{ざんげ}悔^げ、ふ
恥^{はづか}じうござりますすと、語^{かた}るよつけて惟^{ただ}盛^もも、榮^{ぐら}花^{ばな}の昔^{むかし}父^{ちち}の事^{こと}思^{おも}ひ出^でされ
御^ご膝^{ひざ}よ、落^おる涙^{なみだ}ぞいたのしき、娘^{むすめ}お里^{さと}の今^{いま}宵^{よひ}待^{まち}月のあつらの殿^{との}もふけ、寐^ね
道^{みち}具^ぐ抱^{かか}へ立^た出^でられ、主^まのはつと泣^な目^めを隠^{かく}し、彌^や助^{すけ}、今^{いま}云^い聞^きした通^{とほ}り、上^{かみ}市^{いち}
村^{むら}へ行^い事^{こと}を必^{かならず}く、忘^{わす}れまいで、今^{いま}宵^{よひ}のお里^{さと}と爰^{こゝ}よゆるり、喚^{こゝろ}とおれどの
離^{はな}れ坐^ざ敷^{しき}遠^{とほ}いが花^{はな}の香^かがあふて、氣^き樂^{らく}よ有^あふと打^う笑^{わら}ひ、奥^{おく}へ行^いのも娘^{むすめ}の
嬉^{うれ}しく、粹^{すい}など、さん離^{はな}れ坐^ざ敷^{しき}の隣^{となり}まらず、餅^{もち}つさせうど、おかし、こち
らに爰^{こゝ}よ天^{てん}井^{じやう}拔^ぬ寐^めて花^{はな}やろと蒲^{とん}團^{どん}敷^{しき}、惟^{ただ}盛^も卿^{けい}のつく、と身^みの上^{うへ}又^{また}の
都^{みやこ}の空^{そら}、若^わ葉^はの内^{ない}侍^しや若^わ君^{きみ}の事^{こと}のみ思^{おも}ひ出^でされて、心^{こゝろ}も濟^す氣^きも浮^{うか}せ、打^う
まほれ給^{たま}ひしを、思^{おも}ひせぶりとお里^{さと}の立^た寄^よ、コレ^{これ}なア^アま^まえんき何^{なに}初^{はつ}心^{しん}か
案^{あん}じてぞ、二^{ふた}世^よも三^{さん}世^よもかための枕^{まくら}、ニツ^にツ^つからべたこちやねよと、先^まへこ
ろりと轉^{うた}寐^めの、戀^{こひ}のわなとぞ見^みへよけり、惟^{ただ}盛^も枕^{まくら}よ寄^よ添^そ給^{たま}ひ、是^{こゝろ}迄^{まで}こそ返^{かへ}

の情夫婦となれば二世の縁結ぶよつらき一つの云譯、何を隠さふ某の、
國も残せし妻子有、貞女兩夫よま見へずの掟の夫も同し事、二世のかた
めの赦してと、流石小松の嫡子迎とけたやうでもとこやら親御の氣
風残りける、神あらず佛あらねばそれぞ共、えらぬ道をバ行迷ふ、若葉の
内侍の若君を宿有方よ預け置、手負の事も頼んど思ひ寄る身も縁のは
し、此家を見かけ戸を打たしき、一夜の宿と乞給へば、惟盛のよい退まほ
と表の方、たしくとぼそと聲を寄、此内の鮎商賣、宿屋でいござらぬと、あ
いそのさいのがあいそとなり、是申稚さを連た、旅の女、是非よ一夜と
宣ふよ、断いふて歸さんと戸を押ひらき月かけよ、見れば内侍と六代
君、はつと戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしくそろく立寄見給
へり、早くも結ぶ夢の体、表よ内侍のふしぎの思ひ、今のどうやら我夫
よ似たと思へど形容、つむりも青き下男よもやと思ひ給ふ中、戸を押ひ

らいて惟盛脚、若葉の内侍か、六代かど、宣ふ聲にヒヤッ扱の我夫とほ様か、
あつかしやど取継り、詞のあくて三人の泣より外の事なき、先々内へ
と密に伴ひ、今宵の取わけ都の事、思ひ暮して居たりしが、親子共は息災
で不思議の對面去ながら、某此家も居る事を誰えらせじぞ殊も又、はる
ばるの旅の空供連ぬも心得せど、尋給へば若葉の君、都でお別れ申てよ
り須磨や八島の軍を案じ、一門残らせ討死ど、聞悲しさも嵯峨の奥、泣て
ばつかり暮せしよ、高野どやらんよおのするどいふ者の有故よ、小金吾
召連お行衛を心さす道追人に出合、可愛や金吾の深手の別れ頼みも力
もない中よめぐり逢たの嬉しいが、三位中將惟盛様が、此姿の何事ぞ、袖
のさい此羽織も此おつむりのど取付てむせび、たへ入給ふよぞ、面目な
さよ惟盛も、額も手を當袖を當伏沈みてぞおのします涙の内よも若葉
の君伏たる娘も目を付給ひ、若い女中の寐入るな、殊も枕も二つ有定め

てお伽の人あらん、斯ゆるかしきお暮しあら都の事も思し召風の便りも有べきよ、打捨給ふにどうよくと恨給へば、夫も心よかくりしかど、みの落ちる恐れ有、わけて此家の彌左衛門父重盛への恩報じと我を助て是迄よ、重く厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折から娘の戀路、つれなくいなり過あらん、却て恩が怨ありと仮の契りの結ぶ共、女の嫉妬又大事も漏す、と彌左衛門も口留して我身の上を明さず、仇な枕も親共へ義理よ是迄契りしと、語り給へば伏たる娘、こたへ兼しか聲上てわつと斗りよ泣出す、何ゆへど驚く内侍若君引連送のかんどま給へば、これお待下されど涙と俱よれ里のかけ寄、先々是へと内侍若君上座へ直し、私にお里と申て此家の娘徒者憎いやつと、思し召されん申譯、過つる春の傾色めづらしい草中へ、繪よ有やうな殿御のお出、惟盛様との露えらす女の浅い心から、可愛らしいとしらしいと思ひ初たが戀

のもど、父も聞へせ母も夢もまらして下さつたら、譬こがれて死れ
ば、迎、雲井も近き御方へ鮎屋の娘が惚られふか、一生連添殿御迄やど、思
ひ込で居る物を、二世のかため叶ぬ、親への義理も契つたど、情な
いお情も預りましたとどうと伏身をふる、はして泣けれ、惟盛卿の氣
の毒の、内侍も道理の詫涙、かなく間もさき折柄も村の役人かけ來り戸
をたし、いて、爰へ梶原様が見へまする、内掃除しておかれいと云捨
て立歸る、人づはつと泣目も晴いか、はせんと俄の仰天、お里のさろ
くも心付、先親の隠居屋敷上市村へと氣をあせる、實其事の彌左衛門
我も教へ置しかど、最早ひらかぬ平家の運命、檢使を引請いさぎよふ
腹かき切んと身拵へ内侍は悲しく、此若の幼氣さかりを思し召、一先
爰をど無理やりも引立給へ、惟盛も、子も引さる、後髪、是非なく其場を
落給ふ、御運の程を危けれ様子を聞たか、いがみの權太勝手口より踊出、

お觸ふの有た内侍六代惟盛彌助めせしめてくれんど尻しりひつゝらげかけ
出すを、レ待てどお里は取付調兄様是は一生のわたしが願ひ見赦ゆるして下
されど頼めど聞きはね飛とし、大金よなる大仕事しごと邪よまひろくさどずがる
を蹴倒けたしはり飛とし、最前さいぜん置し銀かねの鮓桶すく是忘れていど引提ひっさげて跡あとを慕したふて
追て行ういど、様か、様ど、お里が呼聲よこ彌左衛門、母もかけ出何事とどへ
バ娘むすめのコレ、都みやこから惟盛様の御臺みだい若君尋さまよひお出有、つもる咄はなしの
其中へ詮義せんぎよくるとゑらせを聞、三人連て上市へ落おしましたを情なさけあい、
兄様が聞て居て討取か生捕いけとらて、褒美ほうびよするとたつた今追かけてと、いふ
よりびつくり彌左衛門と一大事たいじと嗜たしなの朱鞆しよとの脇指腰わきさしよぼつこみかけ
出す向ふへ、レ矢はづの挑燈てうてん梶原平藏景時、家來あま數多たよゑつてい持
せ道をふさいで、レ老悖らうはいめ何所どこへ行い、逃にげさふかと、追取まかれては
つと吐胸とね、先も氣づかい、爰も遁のがれず七轉八倒しちてんぱつたう心の早鐘がね、時又時つくこと

く、こいつ横道者、儂も今日惟盛が事詮義すれば、存せぬまらぬと云ぬける、其儘として歸せし、思ひ寄す踏込ふ爲、此家も惟盛かくまひ有擧所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打取物も取あへず來れ共、油斷の休の儂を取逃すまい爲、首討て渡すか、但違背も及ぶか、返答せいとせめ付られ、叶ぬ所と胸をすへ、成程一旦のかくまひさいと申たれども、餘り御詮義強き故隠しても隠されず、早先達て首討たり、御覽も入んお通と伴ひ入る母娘どふ成事と氣づかふ中、鮮桶提彌左衛門まづノ、出て向ふも直し、三位惟盛の首、御受取下されよと、蓋を取んとする所を、女房かけ寄りちやつと押へ、此親父殿、此桶の内よりわしがちつと大擧な物を入れて置た、こなさん明てどふするぞ、われもあるまい此桶より、最前惟盛卿のね首を討て入置た、此桶よりこなたに見せぬ物が有と、引寄れば引戻し、儂が何よもまらぬ故、こなたがまらぬ故と、妻の銀

と心得ておらそひ果ねば、梶原平藏、扱あつかひこいつらいひ合せ縛しばれくしれ
と下知したちの下、捕とらたくと取まく所ところも、惟盛ただも夫婦がきめ迄、いがみの權太が
生捕なまとりたり討取うたりと呼よべる聲こゑはつと計はかりに彌左衛門女房娘も氣いきに狂きやうらん、
いがみの權太ごんたいかめしく若君内侍わかしんないしを猿縛さるしばり宙ちゆうより引立目通りひきためどりよどつ
かど引すへ、親父おやぢのまいすが、三位惟盛さんゐただもを熊野浦くまのうらより連歸つらぎり、道みちよて天窓あまど
を剃かこぼち、青二才あおにさいよして彌助やいすけと名なをかへ、此間こゝのほてくろしき笠かぶとせん
さく、生捕なまとりて頬ほ恥ぢと存ぞんじたよ思おもひの外手ぐわいじ強たかいやつ、村むらの者ものの手てをかつて
漸やがと討取う首くびよ致いたして持參も御實檢ごじつけんと指出しゆしゆを、成程なりほど、剃かこぼち彌助やいすけといふ
どの存ぞんちがら、先達せんたて云ぬ彌左衛門やいざゑもんめよ、思おもひ違ちがひをさそふ爲ため、聞及きかん
だいがみの權太ごんた、悪者あくものと聞たがお上かみへ對たいして忠義ちゆうぎの者もの、でかいたくと内
侍ないし六代生捕むつだいなまとりたあ、へちよい器量きりやう夢野ゆのの鹿しかで思おもひずも、女鹿めしか子鹿こしかの手てよ入いり
道みちの植うき、褒美ほうびに親おやの彌左衛門やいざゑもんめが命いのち赦ゆるしてくれふ、いやく、親おやの命いのち

らぬを赦してもらふと思ふて、此働きの致しませぬ親の命にとられても褒美がほしいの、ハチあわのわろの命のわろと相對私より兎角か銀と願へば梶原、小氣味のよいやつ、褒美くれんと着せし羽織ぬいで渡せばぶつてう類、其羽織頼朝公のお召かへ、何時でも鎌倉へ持來たらば金銀と釣がへ、囑託の合紋と聞より戴き出來た、當世術が時行又依て、二重取をさせぬ分別よふした物と引かへ、繩付渡せば請取て道を器と納めさせ、權太彌左衛門一家のやつら暫く汝と預る、お氣づかひあされませ、貧乏ゆるぎもさせませぬ、扱健氣お男めと譽そやして梶原平藏繩付、引立立歸る、これ、其次手褒美の銀忘れまいぞと見送る、透間、油斷見合せ彌左衛門、憎さも憎しと引だかへぐつと突込恨のやいば、うんどのつけよそりかへる、見るも親子の、はつと、憎いながら悲しさの、母の思はずかけ寄て、天命まれや不孝の罪思ひまれや

と云ふがら、先立物の涙もて伏沈みてぞ、泣居たる、彌左衛門はがみをあし、泣き女房、何はへる、不便なの可愛のといふて、こんあやつを生て置の世界の人の大きな難義じやない、門端も踏すあど云付置たよ内へ引入大事のく、惟盛様を殺し、内侍様や若君をよふ鎌倉へ渡したあ、腹が立てく、涙がこぼれて胸が裂るのい、三千世界も子を殺す、親といふのいおれ斗適手がらな因果者よ、よふまおつたと拔身の柄碎る斗よ握り詰るえぐりかけるも心い涙、いがみよいがみし權太郎刃物おさへて、親父殿、何じやれ、こあたの力で惟盛を助る事い、叶いぬく、いふあ、けふ幸と別れ道の傍よ手負の死人、よい身代りど首討て戻り此中よ隠し置是を見おれど鮓桶取て打明れば、ぐんらりと出たる三貫目、こりや銀じや、こりやどふじやど軋果たる斗よ、手負の顔を、打あがめ、おいとしや親父様、私が性根が悪さよ相談の相手もあく、前髪のを、惣髪よして

渡さふと、了管違ひのあふさい所、梶原程の侍が、彌助といふて青二才の男に仕立有事を、しらいで討手よ來ませふか、夫といひぬ、あつちも工み、惟盛様は夫婦の、路銀よせんと盗んだ銀重いを證據よ取違ふた鉾桶、明て見たれば中よ、首はつと思へど是幸、月代刺てつき付たり、やつぱりお前の仕込の首、其又根生で、御臺若君よ繩をかけ、おせ鎌倉へ渡したぞ、其お二人と見へたの、此權太郎が女房、駈、まて、惟盛様御夫婦若君の何國よ、逢せませふと袖より出そ一文笛、吹立れば、折よしと惟盛卿内侍の茶汲の姿とあり、若君連てかけ付玉ひ、彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を、手を負たかと驚くも、おかひりないかと惱りも一度、興をぞさましける、母の悲しさ手負よ取付、かほど正しき性根よて人よ疎まれ、譏らるゝ、身持のあせよしてくれた、常が常おら連合がむざど手荒も負せまい、むざい事をとせき上て悔み、歎けば權太郎、其悔み無

用く、常が常ちら梶原が、身がなりくふての歸りませぬ、まだ夫さへも
疑ふて親の命を褒美にくれふ、忝いといふと早詮義と詮義をかける所
存いがみと見た故汕断して、一ぱいくふて歸りし、禍も三年と悪い性
根の年の明時、生れ付て諸勝負と魂奪られ、けふもあちたを甘雨街取た
る荷物の内、恭く敷高位の繪姿、彌助が顔と生うつし、合点がいかぬ
と母人へ、銀の無心をおどり入込、忍んで聞べ惟盛卿、御身と迫る難儀
の段々、此度性根改めす、いつ親人の御機嫌と、預る時節も有まいと打
てかへたる悪事の裏、惟盛卿の首の有ても内侍若君のかかりと立る人
も、かく途方にくれし折から、女房小せんが、駈を連、親御の勘當、古主へ
忠義、何狼狽る事が有、わしと善太を、こかうと、手を廻すれば、駈めも、隙
といつまよと、俱又廻して縛り繩、かけても、手がはづれ、結んだ繩も
まやらほとけい、がんだおれが直ち子を、持た、何の因果じやと、思ふて

の泣きめての泣後手よし其時の心の鬼でも蛇心でも、こたへ兼ねたる
血の涙可愛や不便や女房も、わつと一聲其時血を吐ましたと語るよ
ぞときみ返つて彌左衛門聞へぬぞよ權太郎、孫めよ繩をかける時、血を
吐程の悲しさを常も持ていあせくれぬ、廣い世界よ嫁一人、孫といふの
もあいつ一人、子供大勢遊んで居れば、親の顔を目印よ、にがみのはしつ
た子が有かど、尋て見て、コレ子供衆、權太が息子の居ませぬかと、とへど
子供などの權太、家名の何ども尋られ、おれが口からまんざらよ、いがみ
の權どの得云ず、患者の子じや故よ、はね出されてあるであると思ふ程
猶そちが憎さ、今直る根性が半年前よ直つたら、ば親父殿嫁女や、孫
の顔覺へて置ふのに、くおれもそればかりとむせかへりわつと斗り
伏沈む心ぞ、思ひやられたり内侍の始終御涙、惟盛卿の身よせまる、いと
と思ひよかきくれ給ひ、彌左衛門が歎きさる事あれ共、逢て別れ、逢て死

るも皆因縁、汝が討て歸りたる首の主馬の小金吾、内侍が供せし譜代の家來、生て盡せし忠義のうそく、死で身がゐる忠勤厚し、是もふしぎの因縁と語り給へば、扱もそんなら是も鎌倉の追手の奴等が皆所爲、云よや及ぶ、右大將頼朝が威勢よはびこる無得心、一太刀恨ぬ殘念と、怒りよ交る御涙、實お道理と彌左衛門、梶原が預たる陣羽織を取出し、是の頼朝が着がへ、逆、褒美の合紋も殘し置し、寸斗くも引裂ても、御一門の數も足ねど、一裂づ、御手向、遊ませと指出す、何頼朝が着がへどや、晋の豫讓が例を引、衣を刺て一門の恨を晴さん思ひしれど、御はかせよ手をかけて羽織を取て引上給へば、裏も摸樣か歌の下の句、内や床しき、内ぞ床しきと、二つならべて書たるの、心得ず、此歌の小町が詠歌、雲の上の有し昔よか、ならねど、見し玉簾の内や床しきと有けるを、その返しとて人も知たる此歌を、物々敷書たの不思議、殊も梶原の和歌も心を寄

し武士、内や床しき、此羽織の縫目の内ぞ床しきと、襟際附際切ほどき、
見れば内よの袈裟衣、珠數まで添て入置た、リヤどうじや、こいかよと鞆
る人、惟盛卿もさもろふずさもわらん、保元平治の其昔、我父小松重盛
池の禪尼と云合せ死罪、極まる頼朝を命助けて伊東へ流人、其恩報じ
よ惟盛を助けて出家させよ、との、鸚鵡返しか恩がへしか、ハ、敵あがらも
頼朝の適の大將、見し玉だれの内よりも心の内の床しやと、衣を取て是
迎も父重盛の御かけと戴き給ふぞ道理ある、人よはつと悦び涙、手負の
權太の這出摺寄す及よぬ智恵で梶原を、謀つたと思ふたが、あつちが何よ
も皆合点、思へば是迄街つたも、後の命を銜る、種とまらざる、淺ましと、
悔みよ近き終り際、惟盛卿も是迄の佛を銜つて輪廻を離れず、離れる時
の今此時と髻ふつと切給へば、内侍若君お里の縋り供よ尼共姿をか
へ、宮仕へを赦してと願へど叶はず打拂ひ、内侍の高雄の文覺へ、六

代君が事、頼まれよ、お里の兄も成かひり親へ孝行肝要と、立出給へば彌左衛門、女中の供の年寄の役と諸共旅用意、手負をいたはる母親が、これ難面親父殿權太郎が最後もちかし、死目も逢て下されど留るにせき上彌左衛門、現在血を分た駈を手よかけ、どふ死目も逢れふぞ、死だを見ていゝト足もあるかる、物かいの、息有内ハ叶ハぬ迄も助る事も有ふかと思ふがせめての力ぐさ、留るそなたが嗣欲と云て泣出す爺親も母の取分娘ハ猶、不便しと惟盛の、首ハハ輪袈裟手よ衣、手向の文も阿耨多羅三藐三菩提の門出、高雄高野へ引わくる、夫婦の別れも親子の名残、手負の見送る顔と顔思ひハいづれ大和路や、芳野のこる名物もこれより彌助といふ鮮屋、今も榮ふる花の里、其名も高くあらハせり

第四 道行初音の旅

戀と、忠義ハいづれが重い、かけて思ひハはかりあや、忠と信の武士よ、若

が情なさけと預あづかけられ、静しずみ忍しのぶ都みやこをべ、跡あと見捨すてて旅たび立て、つくらぬ形かたちも義經よしのぶ
の行末ゆきすえの難波津なまはづの波なみよゆられて、たゞよひて、今いまの芳野よしのと人傳ひとつとの噂うわさを
道のまほりよて、大和路やまとぢさして「またひ、行野ゆきの路ぢもかれぬまげみの、まがひ
道、弓手ゆんでも馬手めても若草わかぐさを、分わかつゝ行ゆべ、あゑる雉子きよすのぼつと立てゝほろゝ
けんくほろゝうつ、おれべ子ゆへよ身よこがす我われの戀路こいぢよ、迷まよふ身の
ア、うらやまらねたましや、初鴈はつがね金の女夫連めをと、つま持顔もちがほの羽はねばかま、人より
ましの眞柴ましばさす、宇賀うがの波魂なまの社みやしろの、いと尊とらとくも、かうゝと霞かすみの中なかよ
みかのはらわきて、篋かたみの鼓つづみのかい、くゝのむつ言ことを人よのつゝむ
ふくさ物、それを便たよりよつく、杖つゑも心、ほそ野のを打過うて、見渡みわたせば、四方よもの梢しぢへ
もほころびて、梅うめが枝えうたふ歌姫うたひめの里のの男をとこが聲こゑゝゝ、我われつまが天井てんじやうぬ
けてすへる膳ぜん、晝ひるの枕まくらのつがもあや、天井てんじやうぬけてすへる膳ぜん、ひるの枕まくらのつ
がもあや、つがもあや、おかし鳥とりの一ひとふしよ、人ひともわらやの育そだちよも春はるの

はねつく、手まりひいふうつくくと聞ば、こち風音添て去年の氷りを、
徳わかまは万歳と君も榮へまします、有けう有や頼もしや、さぞお大和
の人あらば隠れ家をいざといん我も初音の、此鼓君の榮へを壽て昔
を今まなすよしもがな、谷の鶯、初音の鼓、えらべあやあす音も連て、
つれてまねくさ、おくれればせなる忠信が旅姿、背も風呂敷をまかとせ
られふて、野道あせ道ゆらぎ、くかるい取ありいそくと、目立ぬやう
も道隔、女中の足と侮つて、嘸か待兼、爰幸の人目あしと姓名添て給ひり
し、は着長を取出し君と、敬ひ奉る、静に鼓を顔とよそへて上り、沖の石
人こそまらね西國へは下向の海上、波風あらくは船を、住吉浦も吹上
られ、それより芳野もましますよし、やがて参りいんと互も篋を取
納め、げも此鎧を給ひりしも、兄次信が忠勤あり、八嶋の戦ひ我君の、馬
の矢表も駒をかけすへ立ふさがる、聞及ぶ其時、平家の方より名高

き強弓能登の守教經と名乗もあへずよつびいてはあつ、矢先のうらむ
しや、兄次信が胸板またまりもあへずまつさかさま、あへなき最期の武
士の忠臣義死の名を殘す、思ひ出るも涙よて袖のかにかぬつ、井筒い
つか御身も、のびやかま春の柳生の糸長く、枝を連る御契りさどかり朽
しかるべきと互に諫めいさめられ急ぐとすれどはかどらぬ、あし原畔
かうの里、土田六田も遠からぬ野路の、春風吹はらひ雲と、見まがふ三芳
野の麓の、里にぞ着よける、丈六忿怒の御像も花よ和らぐ吉野山、軒の霞
ようづもれて、殊勝さまさる藏王堂、櫻のまだし枝の梢淋しき初春の
空、一山の衆徒評定始めと知行下の百姓等お髭の塵取はき掃除靈驗あ
らたき佛より、衆徒の罰をや恐れけん、名斗の静といへど、急ぐ道、忠信が
介抱よて義經の御跡を、漸爰にまたひ來て彌生ならばと云ながら、見渡
そ景も吉野山、百姓共口よ、何と美しい京女郎、花見よ、まだ早いさ、何

の花見で有ぞい、男と女と二人連、腹が孕でせふ事なふ、ついでしてござつたかと問かけられて、いやそんな者でなし、河連法眼殿へ用事有て参る者、是からどふいさますと、皆迄聞ず早合点、込だく、妾奉公よやらしやるの、いかしやればよい仕合せ、河連法眼様といふの此一山の衆徒頭、芳野中の立ふと伏ふと儘な上、女房持て魚や鳥の喰次第、えたらく坊主の様なれど、妻帯といへば格がおもい、どふぞ首尾して仕合せさしやれ、こな様の目高じやの、其法眼様より大切かお客でもござりませか、やうんな事知せぬ、毎日琴三味線で賑やかあとの聞ました、コレ此道を期いてこつちやの方が子守明神、女の参らよやあらぬ所、夫も手前の一筋道左の方又つゝ見へる、大きな門の有所と、教へよ静があい、く、忝ふござんすと氣のせく道をどつかいと打連て、「こそ急き行、早参會と喚鐘よ、山科の法橋坊、無道不敵の一字を蒙ひり、荒法橋と名を呼れ、

のつかくどくる跡も鬼と名乗の違はぬ悪者、梅本の鬼佐渡坊返り坂
の薬醫坊、清僧あがら大太刀帶、大口の裾踏ちらし、けうの評定眞先かけ、
ない智恵ふるはん頼付へ、今迄のふすあ百性共逆様又這かゝめべ、鬼佐
渡傍を睨廻し、まだ掃除仕廻りぬあ、先達て云渡すよのらかりいて隙入
る、年貢時分も待てゐると呵付られ、いぐ富り眼めてん手も箒どつさく
さ、風上から掃廻せば袈裟も衣も土ぼこり、ごくどうめらこりや何仕お
ると、呵る程猶遠慮なふ、掃除まますと無二無三ほこりかづけて逃歸る、
爰も河連法眼とて一山の檢校職、花美を好ぬ萌黄の法服、歩路をきたる
指貫もべく、り有仁躰、いづれも早かりつと、互も前後の挨拶有、各圓
座も列れり、や、有て河連法眼、先達て回狀を以て申せし所、早々の參會
近頃祝着、今日の談合餘の義も有すと、懷中の一通を取出し、鎌倉殿の家
臣我小舅、茨左衛門より期の如き書狀到來、文言を讀聞さば申さず共様

子の明白、先聞れよと押ひろげ、飛札を以て申達す、九郎判官義經の事弟の身として、舎兄頼朝退討の院宣を蒙り、剩へ土佐坊正尊を討取都を立退大和路は徘徊の由、其聞へ有よよつて鎌倉殿御憤り大方ならず、早く討て出すべきの旨國へ配符を廻らし畢討取て恩賞請奉つるべくし、隱置またいて一山の滅亡、此時はひえ、正月十三日河連法眼殿、茨左衛門判、開れたかいづれも、談合と、此事、元來科なき判官殿、大和路は徘徊と有ば、一山の衆徒を頼み來られん、必定、其時の旁顧まれ申てかくまふ氣か、又討て出す所存か、心で濟ぬ事、銘と遠慮なく評議有と、聞もあへず荒法橋、實尤去ながら、我々が評定お尋迄さく、一山の仕置頭、法眼殿から了簡を定め申さるれば、誰有て詞を背かず、一黨せん、先御所存のと問かへす、了簡の胸は有、眞斯くと云聞さ、驚心は合す共、よもやいやと申されまじ、左有るかへつて不覺の基、我所存の跡で云ん先

各の思ふ所、眞直まことも申されよ、といへ共互ともたも心置こころ暫しばし返答へんとう怠たりしが、返り坂の薬醫坊遠慮えんりよおくぬつと出い、先愚僧せんぐそうが存ぞんるの、義經ぎけいをかくまふの二年三年乃至十年廿年、其間立養たてやしひ、獨斗ひとりごの儘ままでも辨慶べんけいといふくらひ拔ひのいへば、いか程ほどくらひ込こんも知しず、と有あてかくまふまいといのど、彼辨慶べんけいめつそう者もの、七ツ道具だうぐの鋸のこぎりで家尻切やじりんも知申しさず、どかど盗ぬすまれずさんより一山いっさんの出いし前まへまで、茶粥ちやがゆをくいせ養やしなふが勘定かんぢやうならんとすもぞ、法眼ほふがんおかしく思おもひながら、それそのも肝要かんよう、採と兩人にんのと云いせもあへずされば、此事このこともわいて勘定かんぢやうも何なにも入いらず、人を救すくふが娑門しやもんの役やく、科とがおき義經ぎけいかくまふ逆鎌倉さかを討手う来きらば、忍辱にんじやくの袈裟けさ引ひかへ降魔かうまの鎧よろひも身みをかため、逆寄さかも押寄おし討取う直ちも鎌倉かまへ追上おりの身みも覺おぼへなき條じょう、す開ひらいて讒者ざんしや原はら一いっと切きならべ夫おも叶かなひぬ物ものならば理非辨わけまへぬ頼朝れんぢょうを討取うて、判官殿はんぐわんでんの天下てんかとせん、我われが所存しよぜん此この通とり、法眼殿ほふがんでんの了簡承れうけんのらんとすける、

またやされぬ、法橋殿の^は懇意^{こんい}有^あ近頃^{こんこん}の客僧^{きやくそう}、横川^{よこがわ}の禪師^{ぜんじ}覺範^{かくはん}此^{こゝ}場^ばへ参^{まゐ}り合^あさず、此^{こゝ}了^{りょう}簡^{かん}も聞^きねば云^いれど、おどや遅^{おそ}きぞ待^{まち}久^{ひさ}しといふ間程^{まじらひ}なく山道^{さんだう}を、まづく^{あゆみ}歩^{あゆ}くる法師^{ほふし}の名^なよし合^あたる横川^{よこがわ}の覺範^{かくはん}衣^いの緋^{つゑ}高く取^と三尺五寸^{さんせきごすん}の太刀帶^{たておび}をらし、末座^{ぼつざ}ますのれど尺高^{たけ}く僧^{そう}がら、ゆる敷^{しき}見^みへよける、^ア待兼^{まちかみ}し覺範^{かくはん}殿^{でん}、近^{ちか}ふくと招^{まね}き寄^よ、法眼^{ほふがん}ずんと立^た上^あり、^ア覺範^{かくはん}、^アレ見^みられよ、霞^{かすみ}の中^{なか}は臆^{おそ}る、二^{ふた}ツの山^{やま}、妹^{いも}兄^せ山^{やま}、是^{こゝ}合^あ体^{たい}の歌名^{うたな}所^{ところ}、川^{がは}を隔^{へだ}て西^{にし}の妹^{いも}山^{やま}東^{ひがし}の兄^せ山^{やま}、山^{やま}の二^{ふた}ツは別^{わか}れたり、妹^{いも}の妹^{いも}弟^{てい}の義^ぎ、兄^せ山^{やま}の元^{もと}より兄^せ頼朝^{よりちう}、頼朝^{よりちう}義經^{ぎけい}兄弟^{けいだい}の、中^{なかつ}芳野^{ほうの}川^{がは}引^ひわかれし、姿^{すがた}の山^{やま}は異^{こと}あらずされば、歌^{うた}よも、流^{なが}ての妹^{いも}脊^せの山^{やま}の中^{なか}は落^おる、吉野^{よしの}の川^{がは}のよしや世^よの中^{なか}は詠^{よみ}たれば、世^よを捨^す人の我^{われ}とでも頼^{たの}み引^ひぬか、但^{たゞ}し又^{また}浪^{なみ}の白^{しろ}刃^{やいば}で討^う取^と氣^きか、手^て短^{みじ}き返^{へん}答^{たう}聞^きん、やされやつと云^いければ、思^{おも}案^{あん}よ及^{およ}ばずつと立^た打^{うち}點^ちいて藏^{ざう}王^{わう}堂^{だう}よかけ奉^{ほう}る、奉^{ほう}納^{なう}の弓^{ゆみ}と矢^や取^とて弦^{つる}引^ひし河^か連^{れん}殿^{でん}御^ご覽^{らん}有^あ手^て短^{みじ}き我^{われ}返^{へん}答^{たう}山^{やま}と

山どの目通りに立たる二木の勝負の目當返答御覽と弦打つがひ、かた
むる迄なくはつしと放す、白矢の兄山の印の木、根深ゆつて立たりけ
る、法眼きつと見、頼朝又准たる兄の山より引れし、頼朝又敵對て義經
の味方よき、と斗り以前の狀、ぐるぐる巻いて懷中し、山科法橋梅本坊
藥醫坊も其通りや、皆一同義經の味方くと呼べ、夫ならバ法眼
が所存も是にて明さんと、同じく弓矢手も取上引かためたのいづれを
的、どちらよ付ぞと見る中も、かつきと放す、義經に名ざす妹山弟の山、
扱ひ法眼頼朝方、義經も弓引るよな、いゝも、落人組せんより、世
も連て一山の破滅よせぬが仕置の役目、えかどそふや、覺範あぢな所
も念が入、義經此山を頼なバ引かけて匿ひれよ、金輪際此法眼搜出して
討て見せう、其時の敵味方、無分別成衆徒原も談合せし隙惜や、けふの參
會是迄く、さらば、くと云捨よ駕を待ずして立歸る所存の程を末審

き、跡又鬼佐渡口あんどり、何の事とふいふ事、云合せたの皆すまた覺
範いどふ思ふぞと、山科諸共尋れば覺範ふつと吹出し、其淺い丁簡故、法
眼が底意をえらぬ、今の詞でどつくりと、義經をかくまひ居る底の底迄
皆知た法眼も我所存義經の味方とい腔と睨んで歸つた眼中、事延とよ
計い々落しやらんも計られず、今宵八ツの手筈を定め、夜討又入て討て
取、鎌倉殿の恩賞又預れ、旁、覺範が夜討のかけ引催促を、聞やくと大木
の、栲根もどつかと腰打かけ、我釋門のよりく、孫吳が兵書諳じたり、
我詞をあやまたず、荒法橋の下、兇十騎余り、燈籠が辻、一文字に、彼が館
又ひたくと押寄て、喚鐘三ツ四ツ乱調せよ、鬼佐渡の又如意輪寺の裏
の手を真直又六地藏の橋を引、敵逃くる時を待さんく、又射て留よ、此
覺範の新坊谷の坊又火をかけ火を上て、聖天山々、無二無三、あかけちら
して勝利を得ん、今夜の勝事、手裏有いさめく、と云ければ、藥醫坊頭

を打ふり、それハ味方の思ふ儘敵強ふして荒法橋が手勢を投退のりかけち
らし、驀直まつしに討て出、勝手の宮を陣所せんとして、門をひつしと打バいかみき
理りことばもも咎めたり、其時ハ八王寺金剛藏王の袖ふる山峯みねも上つてまつ
下りも引誥、指誥射さしあらば、そこもたまらず逃失うせん、其時ハまだ咲ぬ櫻
の木隠れ枝隠れ、木の間々はなの細道を、逃行先ハ天皇橋、大將軍の多寶塔、
時も取ての角檣すみむぐら追くる衆徒を待かけて射かくる矢先ハ扱あいかみ、小さ
かまし荒法橋、何條射共落人が、持たる矢種ハ數知たり、引てハ寄、寄てハ
引、矢種盡させ討取も何の手間障入ひまべきぞ、恐れおそいな音すも用意せよ、いと
ふれ、旁其昔、文武の軍有し時、乙女下つて舞まひかあづ、是反閉はんべいの始めと、いざ
勝軍の義を取て、踏たふく登路とろく踏たふならず、左も七足、右も七足、左右合して十
四足、はたはつしと踏始め、行すもめど逸散いつさんいさみ足して立歸
る、横川の禪師覺範が勇氣希うれある鶯うぐいすの聲なかりせば、雪消ぬ、山里いゝで、

春をえらさし、春の來かから、春あらぬ、九郎判官義經を御慰みの琴三味
や河連法眼が奥座敷、音えめも世上忍び駒柱も立る鴈金も、春を見捨ぬ
志質頼もしきもてあしあり、今朝か他出の法眼心も一物有顔も悠くと
立歸れば妻の飛鳥の出向ひ、異ない早いお歸り、今日の御評定一山の
お仕置か、但し又奥のお客、義經様の御事かんと尋れば、義經の事
共く、扱吉野一山残らずお味方といふ様お品もや、成程く衆徒
の中も返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、海本の鬼佐渡等別して、横川の
覺範、一はあ立て義經の味方といふ、我心を捜見ると知たる故、此法眼
の鎌倉方と云放つて歸つたり、鎌倉方とおつえやる、衆徒の心をこち
からも、捜て見る御了簡、法眼けふより心を改め義經との敵味方、
あのお前の義經様を、鎌倉殿へ討て出す氣、合點行ず、是見よと、懷中
の書翰投出せは手も取上、文言残らず讀終り、義經公此山も御忍びま

します事、鎌倉へ知たやうぢ文跡ぶんてい、いかよも汝がいふごとく、天又口な
し人を以ていひしむる、告知つげせた者あくて小鼻こじらの茨左衛門、斯かいふて越
べきや、内通せられて知たる上、遁のがれなき判官殿、人又手柄てさせんより、
我手よかけて討所存うちどころ、夫つまの眞實しんじつか、應おう、いはん、よこな様、義經公を
切心か、くどいく、うはつと、吐胸つねも突詰つぎつめし夫が刀拔より早く、自害じがいと見
ゆる女房が、持たる刃物引たくり、こりや何とする何で死と、いふ顔きつ
と打守りうちまもり、聞へぬぞや法眼殿、おせ隔へだてて下さるぞ、恩賞おんしょうの御下し文、千
通萬通來た迎も、一旦の契約けいやく變ずることなたの氣質きしつぞやあい、鎌倉殿の忠
臣茨左衛門が妹の飛鳥とび、義經公の御隠れ家、兄の方へえらせたかど、此狀
が來た故ゆゑ疑うたがふての心じやの、覺しかい云譯いひわけをまだくとしておられぬ、
疑うたがふより一思ひよ殺して下され法眼殿と、恨涙いらみぞ誠ある、法眼始終しじゆうを
聞すまし、以前の一通取より早くすんく、よ、引さきく、偽いつはりよ命いのち捨すて

じ女房を疑ふうたがの未練みれんよの似たれ共、義經公へぬけめあき我忠節、衆徒等
が胸中探りし次手、心引見る此偽狀引裂捨れあんなせて、自害を止れ女
房と、解る詞の春の雪恨みも消てなかりけり、法眼歸られしな、面談と
義經公、與の間々出させ給ひ、鞍馬山の好を忘れず、一々の御厚志、祝着詞
よ述がたし、兼てや談せし通り、今日の衆徒の評定委細あれひやうぢやうあさいて承知せ
りと、詭ちやうはつと頭をさげ、師の坊の命と云只あらぬそりやくは方、疎畧なき心
底存の上の身よ余る悦び此上やいべき、武藏坊の奥州秀衡方へ遣つかり
され、は家臣かしん迎少すいせうければ龜井駿河あんどがごとく、思し召下されよとや
詞の内使つかひ罷出、佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行衛を尋たずね出なり、通しやさ
んやと窺ふうかがよとぞ、扱うの無事よて有つるを、こあたへ通せ對面せんと、仰傳
ふる次の間へ法眼夫婦はうがんふとり立て行、案内よ連て入來る、四郎兵衛忠信、御座
の間のこなたよ出、絶へて久しき主君の顔、見るも無念のあら涙指うつ、

ふいて詞なし、大將は機嫌斜きげんなまめあらず、汝なも別れ爰こかしこ鎌倉殿の御詮義せんぎ
つよく身の置所なかりしよ、東光坊とうこうぼうの弟子、河連法眼かづらふくまなも匿かくひれ、心ならざ
る春を向へ、暫しばらくの命をつぐ、我われ姓名せいめいを譲ゆづりし其方、命まこと全く有事我運ごんのま
だ盡つきざる所、頼よりもし悦よろこべし、其砌みせ預けたる静しずかいかゞ成なじぞと、は尋有もとけ
れは忠信未審じゆんみじんげも承うけたまはり、存まがけなきは仰、八島の平家一時も亡はろび、天
下一統てんごうの凱哥かいかを上給ふ折まから、告つげくる母が病氣聞し召及まべれ、御暇ごじま給ひ
つて本國出羽へ歸りしに、去年三月、程ほどあく別れし母が中陰ちゆういん忌きち中ちゆうも合戰
の疵きず口くちおこづき、破傷風はしやうふうといふ病と成、既すでも命も危あやき半、御兄弟ごあにのは中ちゆうさ
け堀川のは所没落はうらくと承うけたまひる口惜がしさ、胸を煎いる程重おもる病氣無念むねんさ余あまつて、腹
切んと存せしかど、せめて主君の御顔ごがほませ、今一度拜奉はらいらんと、念願ねんがん叶なひ
て本服ほんふくどげ、初立はつたちの長旅ながたび忍しのびの道中みちちゆう恙つかなく、此館このやかたも御入ごいりと承うけたまはり、只今參
つた忠信じゆんも姓名せいめいを給たまはりし、靜御前しずみづみを預あづかりし、御誕ごたんの趣おもむき且かつ以て身みも

覺へぬはずと云せもあへず氣早の大將とぼけあ忠信堀川の館を立
退し時折よく汝國より歸り静が難義を救ひし故我着長を汝あたへ
九郎義經といふ姓名を譲り静を預け別れし其方世あき我を見限つ
て静を鎌倉へ渡せしあ義經が有家搜あ來たか只今國より歸りしと
まさく敷偽表裏漂泊まてもうつけぬ義經謀らんと推參不忠二
心の人外引くつて面縛させよ龜井駿河と腹立の聲あかけくる二
人の勇士裾いせ折て忠信が弓手馬手あ反打かけ委細あれて皆聞た
腕廻せ四郎忠信静御前の御行衛明白あ白狀せよ踏付て繩かけふか
拷問して云せふかあどふぢやあどふぢやとせりかけられてせん刀指
添共あ投出し兩人待た麤忽とな待と但し云譯有かあ聞ふあんと
あんどあ難義の最中静御前の御供あ四郎兵衛忠信殿御出と奏者
が聲あ人あ仰天何忠信が又來たとあ合点行すと聞もあへず御前の

忠信立上り、我が名をゐたるの何でも曲者、引くもつて大將への面晴せ
んどかけ行を、ヤあらぬ、詮議の濟迄動さぬと龜井が向ふを、さへ
たり、ヤさなせそ六郎、忠信は有上、又忠信が静を同道、何もせよ子
細ぞ有ん片時も早く是へ通せ、あつと龜井の次の一間へ我身あやぶむ忠信
の黙して、様子を窺へば別れ程へし、君が顔見たさ逢たさどつかいど、河
連が奥の亭、歩くる間もどけしあくる、我君かなつかしやど、人目厭はず
縫り付戀し床しの溜くを涙の色もまらせけり、女心も歎くの尤、別
れし時云聞せし如く、人の情も預かる義經、輪廻きたあきふるまひあら
ねば、つれあくるもてあしたり、忠信を同道とや、いづくも有と尋玉へば、
たつた今次の間迄連立て参りしが、爰へのまだかと思廻し、それく
それとも早ふ爰へ来てしや、いつしよとお目よかする物を、ちつどの間
も先へ抜がけ、まだ軍場かと思ふてか、まんがらあ人での有と恨口ある

詞も不審しん、一倍晴ぬ四郎忠信、我君も其如く覺あき御尋拙者せうしやめい今の先、
出羽の國から戻りがけ、去年お暇申てからお目よかゝるの只今始めて、
そ、あの人のじやらくどてんかうお事斗闘、轉業てんぎやうであし大眞實しんじつ、アレまだ眞
顔かほで欺すのかと、何氣げも媚なまめく詞の中、立戻る龜井の六郎、靜しづ様同道の忠信
引立來らんと存せし所、次の間も有合さず、玄關長屋所げんくわんの方く尋て
も知ずいど、申又心迷まよひせ給ひ、靜しづ爰も居るの其方を預たる忠信さら
ず、只今國を歸りしと物語りする中、忠信靜しづを同道どうだうとの案内あんない二人有中も
も見へざるの不審者しん、面躰めんたい似たる偽者いつせあらずや、靜心しづこころの付ざるかと、仰の
中も忠信をつれくと打あがめ、どふやらそふおつしやれば、小袖も
形かたちも違ふて有、お待遊まちあそびませや、ハッアそれか、そふじや、思ひ當る事が有、君
が筐かたみと別れし時給たまはりし初音の鼓、御覽遊ごらんあそびませ此様も、肌身はだかみも放はなさず手
よふれて、忠信の介抱かいほう請、八幡山崎小倉やわたやまざきこくらの里所よ身みを忍しのび居たりしよ、

折々の留主の中、君戀しさの此鼓、打て慰む度と、忠信歸らぬ事も、かく其
音を感じ、絶る事、ほんゝ酒の過た人同前、打やめべきよろりと、何氣か
い顔付の、よくく、鼓が好そふかと、初手の思ひ二度、三度、四度、目よの
かいつた事、又五度めの不思議立、六度めよのこいげ立、夫よりの打ざり
しが、君爰よと聞付て、心せく道忠信よはぐれた時、鼓の事思ひ出し、打
ふしぎや、目の前よ、くる共、かく見へたるの、女心の迷ひめかと思ふて、連
立來りしよ、又此時宜いゆふぞいのと、上れば、義經公、鼓を打、歸り
くるどい、夫ぞ能詮義の近道、靜うちよ云付る、其鼓を以て同道した、忠信
を詮義せよ、怪しい事有、此刀でと投出し、我手で討れぬ鼓の妙音、夫を
肴よ一献酌ん早と鼓打と云捨奥よ入給へ、龜井駿河も忠信よ引添
てこそ入よけれ、靜の君の仰を請、手よ取上て引結ぶ、えんき深紅を、ない
ませの、調結んで、胴かけて、手の中、まめて、肩よ上、手品もゆしよ打あらず、

聲清々と澄渡り、心耳を澄す妙音の、世も類なき初音の鼓、彼洛陽も聞たる、
會稽城門の越の鼓、斯やと思ふ春風も誘われ来る佐藤忠信、靜が前も兩
手をつき、音も聞どれし其風情、すいやと見れど打止す、猶も様子を調の
音色、開入開いる餘念の躰、怪しき者どの見て取靜、折よしと鼓をやめ、遅
かつた忠信殿我君様のお待兼、奥へと何氣なき詞もはつどの云な
がら、座を立おくれ指賣むく、油斷を見すまじ、切付るを、ひらりと飛退飛
えさり、何とあはるしどと、咎められて氣轉の笑ひ、あの人の氣疎
い顔久しぶりの靜が舞、見よふと注意遊のす故、八嶋の軍物語を、舞の稽
古と鼓を早め、かくて源平入乱れ、船の陸路へ陸の磯へ、漕寄打出打おら
そ、鼓も又も開入て餘念たのひもあき所を、忠信やらぬと切かくる、太刀
筋かひしてかいくるを付入柄をえつかと取何科有て欺し打も、切らる
る覺へかつてなしと、刀たぐつて投捨れば、贖忠信の白狀、仰を請た靜

が詮義、云すバ斯して云すると鼓追取はた〜、女のかよひき腕先
も打立られてハはつと、誤り入たる忠信も鼓打付、白狀、さあど詰
寄られ、一句一答詞あきたひれ伏て居たりしが、漸も頭をもたげ、初音の
鼓手も取上、さも恭しく、押戴、静の前も直し置えづく、立て廣庭へ
おひる姿もまほ〜と、身すぼらしげも、手をつらへ、けふが日迄隠しお
おせ人もえられぬ身の上なれ共、今日國を歸つたる誠の忠信も御不審
かゝり、難義と成故據あく、身の上をヤ上る始り、夫ある初音の鼓桓武
天皇の宇内裏も雨乞有し時、此大和國も、千年功經牝狐牡狐二疋の狐
を狩出し、其狐の生皮を以て拵へたる其鼓、雨の神をいさめの神樂、日よ
向ふて是を打バ、鼓の元來波の音、狐の陰の獸故、水を發して降雨も、民百
姓の悦びの聲を初て上しより、初音の鼓と号給ふ、其鼓の私が親、私めの
其鼓の子でござりますすと、語るよぐつとこいげ立、騒ぐ心を押えづめ、

そまたの親の此鼓、鼓の子じやといやるから、扱をそなたの狐じやの、
ハッある程、雨の祈り二親の狐を取れ殺された其時の、親子の差別も悲し
い事も、辨へあきまだ子狐、藻を被程年もたけ、鳥居の數も重れど、一日親
をも養はず産の恩を送らねバ、豕狼も劣りし故、六万四千の狐の下座
も着、只野狐とさげしまれ、官上りの願も叶はず、親も不孝、子が有バ、畜
生よ野等狐と、人間でいふつえやれども、鳩の子の親鳥より枝を下つて
禮義を述鳥の親の養ひを、育返すも皆孝行、鳥でさへ其通り、まして人の
詞も通じ、人の情もえる狐、何ば愚痴無智の畜生でも、孝行といふ事を、え
らいで何と致しませふ、どの云物の親のなしまだも頼みの其鼓、千年功
ふる威徳の皮、皮又魂と、まつて性根入たの則親、付添て守護するの、ま
だ此上の孝行と、思へ共淺間しや禁中、留置給へバ、八百万神宿直の御
番、恐れ有バ寄付れず、頼も綱も切果し、前世も誰を罪せしぞ、人の爲よ

怨する者、狐と生れ來るといふ、因果の經文恨めしく、日も三度、夜も三度、
豎臙を絞る血の涙、火焰と見ゆる狐火の胸を焦する炎ぞや、かほど業因
ふかき身も天道様のは恵で、ふしぎも初音の鼓、義經公のは手も入、内
裏を出れば、恐れもあし、嬉しや悦ばしやと、其日より付添ひ、義經公の
かかけ、稻荷の森にて忠信が、有合さばどのは悔、せめては恩を送らんと、
其忠信も成かひり、静様のは難義を救ひましたは褒美と有て、勿体あや
醫生も、清和天皇の後胤源九郎義經といふは姓名を給ひりしは、空恐ろ
しき身の冥加、是といふも我親も孝行が盡したい、親大事くと思ひ込
だ心が届き、大將のは名を下されしは人間の果を請たる同然、彌親が猶
大切、片時も離れず付添鼓、静様のは又我君を戀慕ふ調の音、かひらぬ音色
と聞ゆれ共、此耳の二親が、物いふ聲と聞ゆる故呼かへされて幾度か、戻
つた事もござりました、只今の鼓の音は、私故も忠信殿、君の御不審蒙つ

て暫くも忠臣を苦まその汝が科、早く歸れど父母か、教への詞に力なく、
先の古栖へ歸りまする、今迄の大將の御目を掠し段、お情よの静様お詫
めされて下さりませと、椽の下へ延上り、我親鼓又打向ひ、かゝす詞のま
り聲も涙あがらの暇乞、人間よりの、睦じく、親父様、母様、お詞を背きませ
逆、私のもふお暇すまする、どの云あがら、は名、殘惜かるまいか、二親又別
れた折の何よも知ず、一日く立よ付暫くもお傍又居たい、産の思が送
りたいと、思ひくらし、泣明しこがれた月日の四百年、雨乞故又殺されし
と、思へば、照日が恨めしく、曇ぬ雨の我涙、願ひ叶ふが嬉しさよ、年月馴し
鬘狐、中よ敷し我子狐、不便さ餘つて幾度か、引るゝ心を胸欲又、荒野又捨
て出あがら、飢いせぬか、凍へいせぬか、若獵人又取れいせぬか、我親を慕
ふ程、我子もてらと此様よ、我を慕いふがど、案じ過しがせらるゝの、切て
も切ぬ輪廻のさづか、愛着の鎖に繋ぎ留られて、肉も骨身も碎る程、悲し

い妻子をふり捨て、去年の春から付添て、丸一年立や立ず、いねと有連何
ど、あつとやていおれままよかいのく、お詞背かバ不孝と成、盡した
心も水の泡、せつあさが餘つて歸る、此身の何たる業、まだせめてもの思
ひ出、大將の給つたる、源九郎を我名として、末世末代呼るゝ共、此悲
しさの何とせん、心を推量し給へと泣つくといつ身もたへし、どふと伏
て泣叫ぶ、大和の國の源九郎狐と云傳へしも哀なり、辭の道女氣の渠
が誠、目もうるみ一間の方、打向ひ、我君夫とましますかと、中内障
子を開き、委しく聞届けし、扱ひ人、またおかりし、今迄の義經も、狐と
の知ざりし不便の心と有ければ、頭をうなたれ禮をなし、大將を伏拜
く、座を立、立おがら、鼓の方をおつかしげ、見返り、行とさく、消
る共、あき春霞、人目腫、見へざれば、大將哀と思し召、呼かへせば、鼓打
音、連、又も歸りこん、鼓と有けるも、辭、又も取上て、打バふしぎや

音の出ず、是のくくと取直し、打共くこいにかみ、上共平共音せぬ、
扱の魂殘す此鼓親子の別れを悲しんで音を留たよな、人ならぬ身も夫
程も子故の物を思ふかと、打まほるれば義經公、我迎も生類の、恩愛の
節義身よせまる、一日の孝もなき父義朝を長田よ討れ、日あげくらまよ
成長せめての兄の頼朝よと、身を西海の浮沈忠勤仇成御憎しみ、親共思
ふ兄親よ見捨られし義經が、名を譲つたる源九郎の、前世の業我も業、そ
もいつの世の宿酬よて、かゝる業因んけるぞと身よつまさるゝは涙よ、
静のわつと泣出せば、目よこそ見へね庭の面我身の上と大將の、御身の
上を一口よの勿躰涙よ源九郎、たもち兼たる大聲よわつと叫べの我と
我、姿を包春霞晴て、形を顯のせり、義經座を立給ひ、手づから鼓を取上
て、源九郎、静を預り長々の介抱詞よの述がたし、禁裏より給はりし大
切の物あれ共、是を汝よ得さすると指出し給へば、何其鼓を下されんと

や、ハ、有がたや忝や、こがれ幕ふた親鼓、御辭退じたいやさず頂戴てんたいせん、重おもく深ふかき御恩ごおんのれ禮れい今いま君きみのかげ身み又また添そひ、御身ごみの危あやうき其時そのときの一方いっぽうを防奉ふせまらん返かへすくも嬉うれしやあ、夫おとこよそれ、身みの上うへ又また取紛とぎまれ、中事ちゆうじ怠おぼつたり、一山いつさんの悪僧あくそうばら、今夜こんや此館このやかたを夜討ようち又またせんと企くわたり、押寄おしよさする迄までもなし、我轉變てんべんの通力つうりき又また、衆徒しゆとを殘のこらたばあつて、此館このやかたへ引入いれいく、眞向まっこう立割車切たわり、又一また時とき又またかゝりし時とき、蜘蛛手くもてかくあひ十文字じゅうもんじ、或あるひ右みぎげさ左ひだりげさ、上うへを拂はらへば沉しづんで請う、裾すそを拂はらひひらりと飛と、けいえやう飛術ひじゆつの得うたりや得うたり、御手ごて又また入いて亡はらぼすべし、必かならぬからせ給たまふかと、鼓つづみを取とて禮れいをあし、飛とがごとく又また行末ゆきすえの跡あとをくらまし失うせ又またける、始終しじゆうの様よう子詳こま又また聞きて驚おどく四郎兵衛龜しやうべゑかめ井駿河諸共いせまがら又また御前ごまへ又また進出生類しんしゆじゆうるいの誠まこと有辨舌べんぜつ又また、大將たいしやうの御疑ごうたがひも某それがしが心こころも晴はて、此世このよの大慶たいけい上うへあしと、中詞ちゆうじも終おらぬ所ところへ河連法眼かづねほつがん罷出ま、怪力亂神あまのりやうじんを語かたらすといへ共とも、彼源九郎かのへんくわうが中ちゆうせし一山いつさんの衆徒しゆと、今宵こんや夜討ようち又また來きる條じょう、

先達て忍びを入ゆ所、恰も符節を合することし、敵を引受戰はんか討て
出ゆべきや、賢慮いかゞと伺へば、四郎兵衛忠信よき計略ござんされ、狐
又譲り給ひしも、元ハ拙者又給ひる姓名、君よかりつて討死せば、一旦事
ハまづまらん、ひらさら御免を蒙り度存奉りいと、餘義なき願ひ又御大
將我思ふ子細有バ、暫く此場ハ立退れず、我名を名乗衆徒等を謀れ、汝死
されバ我も死、必討死すべからず、と御帶刀を給てける、仁徳厚き御詞よ
出行跡を見送つて靜來れど、打つれ奥よぞ入給ふ、時も移さず入來るハ
山科の荒法橋、我慢の大太刀指こいらし、案内よ及ハぬすつと通り、
法眼殿只今ハ直の御出近頃、祝着義經擲ふかれしとや、お手柄といひお
使がら、早速ながら來つたぞ、詞よ人々、目を見合せ、扱ハ鼓の返禮よき
やつを謀り寄たるよと心よ黙頭いかよもく、奥の殿よ擲置さあいな
いざと先よ立龜井よ目はじき間もあらせず、得たりと利腕取手も早く

床も碎けとすでんどう、起しも立ず蹈付く、早繩たぐつてくくり上、宙
も引立大將の見参も入んといさみ行、義經ならぬ源九郎が斗略とこそ
まられたり、次へ来るの梅本の鬼佐渡、何でもつかみ喰いん頼付、眼も見
ぬ源九郎も、つましれくるどの白衣の、袖押まくつて屋敷の隈々睨廻
し、法眼殿只今の早々の仕合せ、まだ歸られじと思ふたも、何もかも手
ばしかい、囚人の出かし顔ある鼻の下、長廊下をやり通し蹴かへす
轍間踏すべり、するく、駿河も踏のめされ無念く、の手間障いらす同
じく奥へ引立行、扱三番めり返り坂の薬醫坊、くるく、道も佛頂面、レせ
いし、せのし、行わいやい、待やい、コリヤ、其様も引するな、衣や着物が彼れ
もい、扱て無禮な使ぢやと、源九郎も化されて何をいふやら譯もなき、
申よまのさのこもりける、待兼し薬醫坊、ア、く、こちへど寄顔で、小腕ぐ
とと捻上れ、ア、ア、ア、こりや何とする、斯るとそれながら大の法師

を引かづき、貴殿きでん斗たの法眼りやうがんが手料理てりやうりの馳走ちそうぶり、義經公ぎけいこうの献立けんたてを待て切
かた致いたさんと、笑わらふて奥おく又入いりける勇氣ゆうきの程ほど予よたぐひあき、期かと白刃はの
火長あきなが刀鐔たいてん土つち又またつきあらし、衣えの下した海老えび洞鎖どうさり、頭かしら袈裟けさ又また、ひんまどひ、
ゆらりくくと入いたるら只者ただものあらぬ横川よこがわの覺範かくはん大庭おほなば又また二王立におうたて、河連殿かづらねの
いづくら有客僧きやくそう是こゝへ參入さんしよせり、奥おくへ推參おしさんやさんか、どくくと對面たいめんくくと
呼よりあがら歩あゆみ行ゆ後のちの障子しやうじの内うちよりも、平家へいけの大將能登おほしやうのりつねの守かみ、教經けいけい待
ど聲こゑかけられ、思おもひ走はきつと見みかへりしが、聲こゑ有あて形かたちあき、我われを呼よよ
の有ありし、覺おぼへなき名な又また驚おどろきて思おもひぬ氣きおくれ、人ひとあくて恥はか
ざりしと獨言ひとりごとして行所ゆきところを、卑怯ひきやうな教經能登けいけいのりつねの守かみ、九郎判官義經くわじらうはんくわんぎけいがどく
より是こゝを待まちかけたりと、障子しやうじとさつと押おひらく見みるより覺範望かくはんのぞむ所ところ、長
刀柄ながばながくかい込こいで飛とかゝらんす顔色かおしよく又また、ちつ共憶ともおぼせま、莞爾まうごと笑わらひ、け
ま紅くわいの簪印はなの衆徒しゆと又またやつせど隠かくれあし、水練すいれん又また名高なたかき教經けいけい、八島やしまの沖おきよ

て入水と見せ庭を潜つてうかみ出、此世も有とい、どくより知てまがひ
あき面躰、あらがひれあど優美の詞、さかしくも云たりあ、教經もせ
よ誰ももせよ、汝も敵對覺範も物の具もせず出合ひ、此場を助けて囉ひ
たさの退從、命惜さよ骨折り苦勞、九郎どあざ笑へば、我の顔成言事か
あ、弓勢もい及ばず共、太刀打手練り負べきや、天命も盡たる平家の刀義
經が身も立ば、立て見られよ能登の守と、いひせもあへせ上段も薙で
かゝるを小太刀よて、からりてうくはつしと請もどく長刀鑑よて胴
腹つかんと突つかくるを、はつたと蹴させて付入よぞ、あしらひ兼て義
經の詞も似ず逃て入、逃さじやらじと奥の間の隔の障子蹴放しく、
かけ行向ふよこのいかよ、玉座を設安徳帝臍たけなるは姿よく勿躰な
や淺間しや、何とて爰よましますと、胸打さひぎ奏問す、君のけたかき御
覽よて、尼上を始め一門殘らず海も沉と聞つるよ、教經のさあかりし

な、はつと勅答ちよくたう黒髪くろかみを隠かくせし頭巾づきんかき合あぐり捨す、鎧よろひの袖そでかき合あせ、臣みこが乳母めのと子こ讚岐さぬきの六郎むろと云者いひもの能よ登守のりつね教經のりつねと名乘なま安藝あきの太郎たろう兄弟あにを左右みぎひだりと扱さみ、海うみへ飛入とびい空そらしく成な、又また此この教經のりつねのひとえらぬ磯邊いそべより上あり、祈禱きたう坊主ぼくしの山科法やまのり橋はし頼たのんでやつす姿すがたの覺範かくはん、義經よしのりも怨うたを報むかへんとかけ入い此間このま、玉躰たまのまします事こと、擒とられさせ給たまひしか、恐れながら勅定ちよくさだも明あさせ給たまへ、と奏そうすれば、まだ幼い天皇てんも、涙なみだよくれさせ給たまひ、教經のりつねも知しこどく、八島やちの内裏うちを遁のがれ出い、頼たのなき世よを待まちつるよ、義經よしのりもめぐり逢あ、源氏げんじの武士ぶしの情有なさけ、心こころも恥はて知し盛さかり、我事わがことをくれと、頼たので海うみへ入いたるぞ、夫おとこ丸まるも爰こゝも來きて今いま教經のりつねも逢あ、事ことも皆みな義經よしのりが斗たたかひ、日の本ひのくにの主ぬしとの生なるれ共とも、天照神あまてらすかみも背そむきしか、我治わがちめたる我國わがくにの我國人わがくにびとも惱なやまれ、我國わがくに狭せまき身みの上うへも、只ただ母君ははきみが戀こしいぞ、跡あとも有あり其時そのときの富士ふじの白雪しらゆき、吉野よしのの春はる、見みまはしさと暮くへ共とも小原こはらの里さとよ、おのしませす、母上はは戀こしと慕ねがふ身みの、花はなも吉野よしのも何かなにせん、あぢきなの身み

の上を思ひやれど斗よて伏轉びてぞ泣給ふはいたのしさを勿躰あさ、ま
まぢしたりく、知盛も教經も適工みし斗略智謀、義經も見さがされし
の、よつく武運も盡たるあ、是是非もあや口惜やど、無念のおく齒も血を
そゝぎ握り誥たる掌裏も、爪も通らん其氣色、數百斤の睡のおもり懲へ、
兼て居たりしが、しほれし眼くのつと見ひらき、我あがら誤つたり、八
鳥の戦ひ、義經を組とめんとせし所、船八艘を飛こへ、味方の船へ引たる
の斗畧の底を探らん爲、卑怯でいなありしが、今又奥へ逃込しも、我斗畧
を知らる故、龍顔も逢せ奉るの、武士の情で有たよな、今も助る、勝負の
重ねていで歸らん、それ迄の教經が隠れ家へ迂幸あれ、再び廣き世とな
して御母君も逢せません、いざや幸の供どかき抱奉る、馬手の長
柄の大長刀、浮世を牛の車共まろしめされと奏しつゝ、立出んとする所
よゑいと切聲三ふりの太刀音、すいやと長刀引をばめ見返る間もあく

かけ出る、龜井駿河川連法眼面々血刀首引かゝへ、卑怯よひ能登殿、一味の衆徒等一とよ此ことと討取たり、天皇をおどりよして後ろきたあき遊足門打たれば遁れあし、勝負有か際參有か、二ツよ一ツの返答と、詞を揃へて云せも果す々と睨付、願のわがく儘降參とい、儕等が性根よくらべてぬかしたりあ汝等が首一と提ていあん事、何の手間隙入べきよや、帝を我よ渡したる義經が寸志を思ひ助置を、有がたいといぬかさいで逃るあとし、窓外千万、供奉の穢れ思はず、睨殺してくれんずやつばら、飛まがつて三拜せよ、人もなげある廣言、組留て鼻明さんと、三人々の手よ追取卷砂踏ちらして詰寄り、上に教經韋駄天立見下す眼角立て、睨合たる其中よ、帝のこいさ玉の緒も消る斗の風情、待汝ら能忽すあど聲をかけて義經公、烏帽子狩衣引繕ひ物の具あらぬ出立行幸の道をさへ、君臣の禮を乱す其譚少からず、まづそれ旁、義經も天

皇を以て見送り奉らん、用意の裝束斯のごとし、教經一人歸せし迎、天に入
徳も亦く地に入術も有べこそ、何條遁なき命、汝等が手まかけず、此所
有合さぬ、忠信も討すれば、兄次信が敵を討、終羅の妄執さんずる道理教
經の世狭き身、義經も世を憚る身互も城も楯もなき戰場吉野の花矢倉も
勝負くを決すべし、天皇人水と披露して内裏表濟たれば、譬勝共負る
共、君も過致されず、神妙の祠満足せり、鎖細の事まかゝらぬ、教經、義
經斗をねらひひせじ、天下も信どる頼朝が素頭取て、君が代も讎へさん、
其時の義經の庄園を申下して得さすべし、言くとし教經、義經をね
らひ、其儘、兄頼朝も敵對との、開捨ちらずと御大將御帶刀も手をかけ
て、すいやと見ゆる腹心も、分入宥る源九郎狐名をりの恩、忠信がほる
なき思ひまづむるとの目よこそ見へね君の守護、さらばよ義經去りて
も帝のお命助たる情の禮も、教經共、能登守共名乗て、敵對ぬが我返

報再會の名の横川の覺範吉野山よて忠信も出くりにして勝負せん、互の命の其時、行幸成ず雜人原路次の警固と呼びつて、又抱上る安徳帝、君とたれど君たら走、臣とたれど臣たらぬ横川の覺範供奉の役、敵とあから義經が警蹕の聲高く、威義有意趣有情有、河連法眼先睡の役、駿河の仕丁龜井の六位、官人ならぬ堪忍の二字を守つて扣ゆれど、布衣なさ余つて鯉口のくつろぐ光り銀魚袋供奉の門前人目有、赦させ給へど敬つて頭ひさげても顔と顔、睨んで別る、兩大將源九郎義經の義といふ字を讀と音源九郎義經附添し、大和言葉の物語り其名の、高く聞へける

第五

山とりの皆白妙よ白雪の梢するるとき、氣色かな、佐藤忠信大音上、清和天皇の後胤檢非違使五位の尉源の義經、兄頼朝が家來の汝等、現在我も敵

するの主は双向ふ無道人、天狗は習ひし妙術にて一はは蹴殺して、谷の
みくずとしてくれん、觀念せよと呼ひつたり、右往左往は取巻たる、讒者
一味の鎌倉勢聲よ、主従どの事おかし、主か主で有ざるか、討取て見
せ付ん、かゝれやかゝれと一面は、打てかゝるを事共せせ、右へなご立左
へ拂ひ、切立く、切立れば、一先引と鎌倉勢、逃るをやらじと、岨道を足
任せて追かくる、平家の大将能登守、忠信は出合んど、約束違へぬ衆徒頭
巾形も横川の覺範を、人のそれ共白雪を踏み、歩くる山端岩角
けしどまず、追ちらして立歸る佐藤忠信、兼て期したる約束の、敵に向ふ
は待かけたり、鎌倉勢のかへさぬ中は名乗合して勝負せん、立寄相手
をよつこりと笑ふて待たる、勇將義士、互に招かれ、招き合ふ、去年三月八島の
磯にて、大將軍の御馬の先は立塞り、忠信は矢を請どめたる、佐藤三郎兵
衛次信が弟、四郎兵衛忠信、兄の敵平家の大将能登守教經、恨のやいば參

らするどふ名乗ける、まほらしや忠信、兄の敵と名のるからり、討れて
やるが本意なれ共、安徳帝を守り奉りふたしび天下を覆す教經、ふびん
あがら返り打、冥途で兄よ云譯せよ、横川の禪師覺範が、引導してくれん
すと、長刀、杖よつきそらしかんらくと、打笑ふ、詞たしかひ終つて後
眞向かざしよ忠信が、討てかゝる大太刀を、かゝしてはたくはつしと
あふ、ひつばつして忠信が、切身よ入たる太刀先を、もどいて拂ふ長刀の
難手、打手よ事共せず、右よかゝれば左へ踊り、左りよ乗んど取直そ白刃
鑢ていからく、から紅の緋威や、互よ勝色分ざりしよ、覺範頻よ打かく
れば、ひらりと飛で大木の櫻の梢よ身をたもつ、追取直して櫻の木はず
よすつかど切かけて、足よ任せて踏放せば木、めりくく、と中絶し、
向ふの岸よ忠信が、木よかくられて渡り越、跡のかけはし丸木橋、是究竟
と踏まめく、渡る不敵の勇猛將、過てふみどめし足場すべつて谷底へ

落れど落す諸足もろあしは、杖をまどふて眞逆まごさか様、只一刀と討かくる、四郎兵衛が
太刀先を拂ふ、長刀水車、草摺くさずりの音鏢つばの音ちりゝんはたゞ、まつてうゝ
實みめざましき働はたらきへ、追ちらされし鎌倉勢、忠信やらぬと取てかへし、又またば
らくと討あゝるをさむ三寶さんぼ邪摩じやまと渡り合、打あふ隙は覺範が、櫻うか
けし諸足を、切んどかゝれバ木を放はなれ、落るを見捨て鎌倉勢みやしろし塵ちりよと追て
行く、谷よの教經しゆけん手練てれんの早足さそくひるまず巖いはは長刀を、突立つきくかけ上れど
雪に凍たる土くだけ、氷柱つちうは岩石滑なめらかよ、上れバすべりすべつても、岨そま
の梅が枝足代なかには、半上りし岩の上、鎌倉勢を追ちらし、弓手ゆみの方へかけ來
る佐藤忠信覺範あへへと招まねかれて、のぼるゝ隙ひまのあらゝ遲おそし、忠信それへ
と云捨て、さしも又高き頂上てうじやうより、ふんど飛たる飛鳥より、遙はるかく輕かるく其勢
ひ、我もと覺範つゝいて飛、あいや高紐ひも總角あひまきが枝よかゝつてぶらゝく、
稚遊わかあそびは鞆しらせん鞆せんの戯たむれなんど見るごとく、身動うごきあらぬを忠信が、切付る

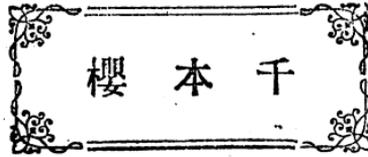
を身を背そむけ、くるりと廻れば、杖すつかり、切放はなされしに天命あまのつぎも盡ぬ所と
大手をひろげ、かゝる相手も太刀投捨互たがひも、ゑいやと引き組くみたり、こりや
こりや〜と忠信が、毘沙門腰びしゃもんこしよて押かくれば、ひらりとばづして、こ
いと踏ふみとまつたる魔利支天まがしあてん、雪踏ゆきふみちらして争あざむひしが、何どか仕けん忠信
が組たる手先もぎ放され、又組寄んとする所をすつと攔つかかつばと投ひ膝ざ
よ引敷折こそ有ふしぎや、又も駈かくる忠信のつかつたる覺範かくはんが、具足ぐそく
の邊間うきまをてうど切ききられてひるますふり返り、見るより恟びつり同忠信こ
いつ何なにぞやと引ひまいたる高紐たかひも攔つかんで引上れば、忠信あらず義經の御着みき
長の鎧斗よろひ是こゝいと軻あきるゝ廬いほを窺うかがひ切付く、切付る、深手にさしもの能登
守まもり寄よりて首取と云より早く義經公かけ付給ひ、いかゞ教經、安徳帝やすの
原の里よて御出家ごて遂つひ、御母君の御弟子とせん、適名あたな高き教經あれ共、通力
自在じざいの源九郎狐忠信ゆきも力を添そへたる鎧軍術よろひぐんじゆつもも裏うらかゝず、と仰おほもあへぬ

出合頭河越太郎重頼、左大將朝方を高手小手こゝろいまして、久ひさえうい義經公、給たまひる敵たけ事ことを寄、頼朝追討おいつたの院宣いんせんと號なづし、朝方が業わざと事顯ことあらわれ、義經よしかねと斗たたかいせよと綸命りんめい請こて參まつたりと、聞きふ教經座けいざを立上たり、平家追討たいらけおいつたの院宣いんせんも朝方あそかたが所爲しよわざと聞き、さやつを殺ころすが一門いっもんへの云譯いんわけと、云いふ早く首打落くづし、義經教經よしかねけいけいが首取くづと云いせも果はた、能登守教經ののりもりけいけいの、八島やしまの沖おきよこて入水いりずいせり、横川よこがわの覺範かくはんが首くづの忠信ちゆうしんよと、仰おほの中ちゆうよふり上あて、兄あにの敵たけを討う納なめ打治うちさつたる君きみが代かよ、奥州おくしゆうへ行い小原こはらへ行い、平家たいらけの一類いっるい討う亡なぼし、四海しかい太平たいへい民安みんあん、五穀ごこく豐饒ゆふじゆうの時ときを得えて、穗ほに穗榮ほさかゆる秋津國あきつくに繁昌はんじやう、あらびあらりけり

延享四丁卯年霜月十六日

義經千本櫻 終

明治廿五年八月廿五日印刷
明治廿五年八月廿六日出版



翻刻者
發行兼者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地